

HPVワクチン  
(子宮頸がんワクチン)

# 副反応被害報告集

## 第2集

2015年3月

全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会

薬害対策弁護士連絡会

薬害オンブズパーソン会議

## 目 次

T-20番 平原沙奈	3
T-26番	10
T-29番 吉川佳里	17
T-31番	22
T-35番	28
N-7番	35
N-14番	44
O-1番	50
O-2番	55
O-11番	62
K-8番	69
K-9番 江藤あやめ	72

## 本書について

本書は、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会が実施している子宮頸がんワクチン被害実態調査から、聴取した被害内容を収録したものであり、2013年5月に発行された第1集に続く第2集です。

調査は、薬害対策弁護士連絡会及び薬害オンブズパーソン会議の協力のもと、両団体に所属する弁護士による聴き取り調査の方法で行われ、現在も継続して行われています。

2014年3月の調査開始から現在までに聴取を行った被害者本人及び保護者のうち、聴取内容を陳述書形式で公表することについてご承諾を得られた方の聴取結果を本書に収録しています。

## T-20番 平原沙奈 要約

(平成27年3月現在)

### 1 被害者

平成9年8月生。接種時中学2年生（14歳）、現在17歳。埼玉県在住。

### 2 ワクチン接種前の健康状態等

分娩時脳性麻痺のため車椅子の生活で右手が不自由だが、小中学校の普通学級に通学し、欠席は殆どなく、勉強が好きで、高校も普通校を受験する予定だった。小学5年から接種時まで1年に1回程度のとんかんの発作はあったが、数分で回復していた。普段は健康。

### 3 接種

サーバリックス3回（平成23年8月23日、同11月8日、平成24年4月6日）

### 4 経過概要

平成23年11月 2回目接種から起床時頭痛を度々訴える。

平成24年4月27日 3回目接種後21日目、てんかん様の大発作が19分も続き、救急搬送。

5月以降 手足に自由が利かない、ぴくぴくする、不随意運動、めまい、

6月27日 発作（これまでの発作と違い、手が動かず、声も出せない）

8月以降 手の関節、膝上が痛み、整形外科、神経科等受診するも原因不明。

9月以降 脚が痛くて車いすに座るのも苦痛、手が痛くて字が書けない、受験勉強もできず、進路を特別支援学校に変更。

平成25年3月 この前まで3ヵ月ほど手足の痛みがなくなっていたが、再発。だんだん悪化。4月には激痛に変わる。

5月 朝の激痛が最高に。痛み止め座薬は効かず泣き叫ぶ。テレビ報道を見て、ワクチンの影響疑う。

9月 信州大の池田医師の診察を受け、ワクチンが原因と言われる。

11月 カイロプラクティックに通うたび段階的に痛みが減少。

平成26年5月 目の痛み・涙と視力障害。不随意運動（頭や手が30分～2時間）、足の裏や足首の疼痛が再発。

7月以降 疼痛悪化。8月～便秘、9月～幻覚、10月発作、疼痛激化。

### 5 これまでに発症した主な症状

関節痛、筋肉痛、てんかん様発作、不随意運動、目眩、記憶力低下、生理不順、にきび様の発疹、あざ、耳鳴り、痒み、筋膜炎、視力障害、便秘、幻覚、倦怠感

### 6 受診医療機関

13医療機関

### 7 現在の生活状況

カイロプラクティックにより一時疼痛は減少したものの、また、痛みが復活。目の痛み・視力障害が発現、不随意運動も再発しているが、特別支援学校高等部に通学している。

平成26年10月発作以降、疼痛激化し、学校の早退欠席続く。平成27年3月入院。

### 8 救済制度の申請 申請していない。

1 はじめに

(1) 私の生まれ育った経緯

私は、1997年8月生まれの現在高校2年生で、双子の姉妹の妹です。母の前置胎盤の大出血で8か月1416gと小さく生まれ、分娩時低酸素状態に置かれたため、脳性麻痺が残り、身体障害者等級1級（脳性麻痺による四肢体幹機能障害）の手帳の交付を受けました。

しかし、両親が訓練士の資格を取って、米国フィラデルフィアのドーマン研究所からの指導を受けて、私に対し、24時間、脳の機能を回復させる訓練を施してくれました。その結果、私は地元の公立の小学校に入学するまでに、話したり、左手で字も書いたりできるようになり、足が不自由なので車椅子であることと、右手が不自由なだけで、あとは通常学級で皆と同じ生活を送ることができていました。

私の両親は、このようにとても努力して医師も驚くほどに訓練し、また教育長や市に働きかけて、障害児を取り巻く環境も地域を巻き込んで変えていながら、私を育ててくれました。

また、双子の姉はいつも私と一緒にいて、小学校・中学校へも一緒に行き、危険がないか親代わりのように見張って、私と一緒に大きくなりました。

家にはボランティアの方がいつも来てくれて、その数は延べ60人ほどになりました。私は新座市の人々みんなに育ててもらったようなものだと、母は言っています。

(2) 勉強に励んだ学校生活

小学校5年生のとき、学校給食で、玉こんにゃくを誤飲し、喉に詰まって一時窒息状態となり、救急搬送されました。その1週間後、はじめててんかん発作を起こし、以後小学校5年生から中学3年まで、合計7回てんかん発作が起きました。中学1年の時から、てんかんの薬を服用するようになりました。

てんかん以外には、大きな病気はなく、健康に育ちました。勉強の面では、人よりも書くのが遅いということがあって、宿題やテストには人より時間がかかりましたが、課題は遅くなくても必ずやりきって提出し、学校は休まず、勉強を頑張っていました。

中学校のあとは、車椅子の生徒の入学に実績や理解ある県立の普通高校を受験するだろうと、母も私も思っていました。

小学校のとき、校長が「この子の車椅子に触っちゃダメ」と級友に言ったことから、小中学校の友達が学校で、私に距離を置くような傾向があって、私は、「せめて勉強を頑張る。そして、高校に行ったら友達を作りたい。高校に行ったら、人生を変えるんだ。」と決意し、家族にもそう言っていました。

だから、私がワクチン接種のあと、手足の激痛で高校へ行けなくなったのは、学校に行きたくないからなんかではありません。本当に、友達と会いたくて、学校に行つて勉強したくて、頑張っていました。学校が大好きだったのです。

2 子宮頸がんワクチン接種に至る経緯

(1) 市からの通知

中学校2年の時、市からピンク色のお手紙で子宮頸がんワクチンの接種の案内が来て、高校1年生までに3回接種をしなくてはならないと思いました。私たちは双子なので、助成がある3月までに打てば無料、4月からは2人で10万円となるので、親にとっては大きな違いでした。また、このワクチンの案内が来た時、祖母が、私の車椅子の友達が幼い頃にお母さんを亡くした原因が子宮頸がんだったと話していたこともあって「このワクチンを打てば子宮頸がんにならないのだから、受けなくちゃ。」と思ったのです。

私と双子の姉、それに車椅子の友達は、3人で一緒に、新座病院で3回ともサーバリックスの接種を受けました。

最初は、中学2年の平成23年8月23日、2回目は同じ年の11月8日、3回目は中学3年の平成24年4月6日でした。

## (2) 接種の際の説明はなかった

ワクチンを打つ際、医師や看護師の口からは、ワクチンについての説明は特にありませんでした。母が、説明文書をももらったようですが、接種後、何も知らないうちに処分してしまいました。

注射を受ける前に唯一医師から言われたのは、注射を打つ腕を「(左右)どっちにする？」ということだけでした。

## 3 ワクチン接種後の痛み

このワクチンは、他の今まで受けたワクチンよりは痛くて、痛みが3、4日続きました。また、打ったところにしこりができていました。このように思ったのは3回目の接種のときだったと思います。1、2回目は特に変わったことはなかったと思います。

## 4 2回目接種後の頭痛 ～ 異常と思われる出来事の始まり

今思えば、2回目のワクチン接種のあと、朝起きるときに頭痛がするようになっていました。あれが異常の始まりだったと思います。

平成24年1月、頭痛薬を処方してもらいましたが、我慢できるくらいなので、あまり薬は飲まないようにしていました。

## 5 3回目接種21日後の大発作 ～ 双子の姉と同日の異常

最も印象的なワクチン接種後の異常な出来事は、3回目の接種後の大発作でした。

GWに入る平成24年4月27日、姉の侑奈が39度を超す高熱を出しました。母が姉に水枕をするなどしていた際、ふと振り返って私を見ると、私が意識を失い固まって、てんかん発作のような状態になっていたのだそうです。いつものてんかんなら数分で治まるのに、このときは19分も続き、座薬を入れても効かず、救急車で多摩北部医療センターに運ばれ、点滴を受けて夜中に帰宅しました。

発作のあと数日、わたしは「ぐるぐるする。なんだか変だよ」と言っていました。当時めまいというものを知らなかったのです。そう言っていたと思います。

また、発作のあと4日後くらいに、手足の自由が利かなくなったり、また手が勝手にびくびくし始めました。また、私の意思と関係がなく右足が勝手に上がる、という現象が起きました。

てんかんのかかりつけ医である国立精神・神経医療研究センター小児神経科に、5月22日にかかった際は、医師から「原因が分からないので、てんかんではないか。」と言わ

れ、以前から飲んでいたてんかん薬テグレトールの増量が指示されました。

6月27日（3回目の接種から82日後）、また30分と、経験したことのない長い発作が起きました。右手が硬くなり、私は声も出せないでいたようです。

これまでのてんかんでは、意識はあり話はできていたし、硬直性の痙攣だったので、これはなんだろう、おかしいなと思うようになりました。

## 6 筋肉痛・関節痛の発生と病院のたらい回し

3回目接種から4か月後の8月、手の関節が痛くなり、その2日後、両足の膝の上が痛み出しました。この時は中3の夏休みで、私は長時間勉強をしていたので、母が勉強を禁止し、ゆっくり過ごし手をあまり使わないようにしましたが、効果はなく、手足の痛みは少しずつ悪化していきました。

心身障害児総合医療センターの整形外科を受診しても、原因不明とされ、処方された薬は効きませんでした。

その後、夏休み中、家では足を台に乗せて上げていないと、痛みがひどくていられないようになりました。

9月に入り、痛みで車椅子にも座っていられなくなったので、2学期からは学校でも授業中、足を椅子の上に上げて授業を受けるようになりました。

9月14日、朝霞台中央総合病院の整形外科を受診しましたが、整形外科で考えられる原因はないとのことで、「てんかん服用している薬の副作用ではないか」と言われました。

そこで整形外科のアドバイス通り、翌日てんかんの国立精神・神経センターに行きましたが、薬の副作用ではないから様子を見るようにと言われて、それだけで帰されました。

## 7 特別支援学校高等部への進路変更

私は、中学のとき、できれば普通高校を受験して入学したいと思ってはいましたが、中3初めからの不調で受験勉強どころか通常の勉強もできなかったし、この中3の夏休みは、受験勉強どころか、提出物も完璧にはできませんでした。こんなことは初めてでした。小学校入学からこの夏休み前までは、提出物は完璧で、人より提出が遅れることはあっても必ずやりきっていました。

でも、9月に入り、痛みの続く自分の体に自信が持てなくなり、高校は普通高校をあきらめて特別支援学校に行こうかなと考えるようになりました。母に、「これからは自分の体、生活というものに重点を置いた方がいいんじゃないかな。」と言いました。そして、私は、受験を考えていた県立高校から、現在通う特別支援学校へ、進路を変更しました。

## 8 手足の筋肉痛・関節痛の変化

### (1) 筋肉痛・関節痛の悪化で学校を休む

9月25日、とうとう手足痛が我慢できず、学校を早退し、翌日、朝霞台中央総合病院の整形外科を受診し、先日神経センターではてんかん薬の副作用ではないと言われたことを話しました。整形外科でも分からないとのことで、湿布や筋緊張緩和剤を処方してもらいました。しかし薬の効果はありませんでした。

手足の痛みがひどくなり、10月に入って学校の欠席や早退が続きました。

整形外科の先生は、やはりてんかん薬の副作用ではないかと神経センター受診を勧め

ました。

行くところがなくなって、母は困って多摩北部医療センターに私を診てもらえないかと聞きましたが、「国立精神・神経医療研究センターで診てもらっているなら、こちらで処方することはできない」と言われました。それで、やむなく神経センターを受診して、主治医の先生がいらっしやらなかったのも、母が別の医師に事情を話して、今の薬を止めてもらうようお願いしました。

(2) 一時、筋肉痛・関節痛が和らぐ

なぜか、平成24年10月下旬頃、痛みが和らいできて、それから3か月ほど、痛みがない生活が続きました。

11月頃、生理不順に気付きました。小学6年から月に1度きちんと来ていた生理が、2、3か月に1度になってしまっていたのです。

(3) 痛み再発、激痛と闘う日々

平成25年3月20日頃から、また手足の関節痛、筋肉痛が始まりました。4月に、特別支援学校高等部へ入学しましたが、痛みはだんだんひどくなっていき、我慢して通学する日々でした。高校に行ったら私は変わりたい、と思っていたので、生徒会書記に立候補しました。立候補するとき、手を挙げるのがひどく痛かったけれど、我慢して手を挙げました。

痛み止めを飲んでも何も変わらず、激痛に苦しんでいました。朝は特に痛くて、泣き叫んだり、「うー」とうめき声を上げて泣いたりしていました。

4月18日、激痛に耐えかねて学校を休み、国立精神・神経センターを受診しました。病院に行く前に、母が医師に電話をすると、てんかんの薬を止めても痛みが治らないので「ほらやっぱり、てんかんの薬のせいじゃなかったでしょう!」と言われたそうです。

医師は、薬をプラスする一方で新しい薬の中止には反対しましたが、かといって、母が「どうしたら良いですか」と聞いても「わからない」。「どこの科にかかったら良いですか」と聞いても「分からない」との答えで、「先生のお子さんがこうだったらどうしますか」と聞くと「そんなこと分からない」と言われるので、母は「薬のせいじゃないかもしれませんが、とにかく試させてください」と、頼んで、親なりの判断で痛みの原因を追及するため、マイスタンという薬を徐々に止めるようにしました。

なお、後日主治医の先生を変更させていただき、現在はワクチン後の症状に理解のある医師に診ていただいています。

手足に痛み止めとして湿布を貼り、湿布が日光に当てると皮膚炎を起こす可能性があるということで日光を避けるため包帯を巻き、見える手足は包帯だけでした。

5月からは、さらに、私たちが”激痛MAX”と呼んでいる、ものすごい痛みで苦しめられました。「ママー!」「(痛みが)来ないでー!」「やめてー!」と、これ以上出せないくらいの声で泣き叫ぶ毎日でした。母たちは、近所に事情を話して、虐待だとか誤解をされないように説明しました。その痛みは大きな力でねじって引きちぎられるような痛みで朝目覚めたくない、生きていたくない、死んだ方がいいと思うくらいの辛さでした。痛み止めは毎日必ず飲んでいましたが、全く効きませんでした。

5月16日、TVで松藤さんのことを取り上げていたのを、お友達のお母さんが見ていて、「テレビ見てる?沙奈ちゃんと似ていない?」と知らせてくれました。歩行障害



は、私が歩けないので違うけれど、それ以外にはそっくりで、このとき初めて、私の症状も子宮頸がんワクチンのせいではないか、と考え始めました。

しかし、翌日受診した東京女子医科大学総合診療科では「分からない。」と言われ、母が「子宮頸がんワクチンのせいじゃないでしょうか」と聞くと、医師は「子宮頸がんワクチン（のせい）と思わない方がいい」「(そのように他の医師に) 言わない方がいいですよ」と言いました。母が「言うとは何かあるんですか」と聞くと、医師は「いや・・・言わない方がいいな」とだけ答えました。その後にもう一度検査結果を聞きに行きましたが、血液検査も頭部MRIも「異常はない。」と言われました。

学校に行っている、家にも、痛いのは変わらないので、授業を受けていた方が気が違う方に向くのでまだましかと、無理矢理登校していました。毎朝激痛をこらえ、泣きながらスクールバスに乗りました。その様子を見た方の中から学校に慣れてくれば治まるんじゃないかと言われました。午後になれば、全体的に痛みが減ります。両足を椅子の上に上げていないといられないのは一日中で、姿勢が反るようになるため、背もたれが動かせない車椅子では、腰が痛くなるのでした。

#### (4) 他の症状（あざ、生理不順、不随意運動、耳鳴り、掻痒感、記憶障害）

この頃、手足に黒いあざができていたのを見つけました。車椅子で生活していて、ぶつけたわけでもないのに肘の内側や手足に、大きさまざまなあざが自然にできては消え、できては消えとしていました。それは今はかなり頻繁で、それも数が多くなっています。生理は、2月から5月20日頃まで、止まっていた。

5月21日頃から、頭や手がびくびくと勝手に動く、不随意運動が始まりました。てんかん発作では、右手が拳がってしまうのですが、それは無く、不随意運動のときは両手、特に左側が良くびくびく動き、全く動きが違ってきます。

このワクチンを打った新座病院の主治医に会いに行き、初めて今までの経緯や今の症状、検査結果に異常はないこととお話しし、症状がワクチンのせいではないかと話しました。

医師は「ごめんなさいね。私たちは何もすることができないのよ。」と言いました。

5月29日頃、朝から耳がおかしく耳鳴りがしていました。近くにいる家族の話し声が、遠くで話しているように聞こえ、まるでイヤホンをつけているようにモワッとした感じがしました。

痛みのあとは全身の掻痒感に苦しみました。痛みと同じくらい辛いものでした。

ニキビもたくさん出るようになりました。

また、記憶障害も起こりました。9月になり二学期が始まり、勉強も本格化していく頃、「なんだか、勉強が覚えられない、すぐ忘れてしまう」という状態が起きてきました。

## 9 信州大学でワクチンが原因と指摘される

平成25年9月、厚生労働省の副反応研究チームの1つで代表をされていた信州大学の池田先生のところを受診して、「この症状はサーバリックスが原因であろう。」と言われました。両足のMRIを撮って、「筋膜炎の所見あり」と言われて、薬の処方を受けました。

けれど、この薬を飲んで4日後あたりから、幻覚症状が起きてきました。それは日が経

つほどにどんどん酷くなっていき、通学路で車とゴミの山を見間違える、部屋の中で現実にはないものを見るなど、医師に報告して判断を仰ぎ、結局その薬は13日後には中止しました。

#### 10 一時痛み軽減するも再度悪化

平成25年9月頃から、母の知人の食事療法の先生からの指示で無農薬の野菜、自然食、菌類を活用する、まこも風呂、香草、DHAなど、食事療法を開始し、少し体調のよい日が増え、記憶の状態も戻ってきました。さらに11月にカイロプラクティックを受け始めてからは、痛みがよくなり始め、平成26年1月頃には、痛み止めの座薬を入れなくても我慢できるようになってきました。

しかし、平成26年5月から、痛みが復活し始めました。足首、足の裏が痛いことが多くなり、7月頃は、特に足首、足の裏、手の裏の痛みが酷くなり、それも発症が朝と晩に集中するようになりました。湿布や塗る薬を使用し、新たに点滴療法も始めました。不随意運動もまた出るようになってきました。

また、8月頃から便秘が酷くなって、自力では排便できなくなり、前述の手足の痛みの他、便秘による腹痛にも苦しみました。8月頃から、目の痛み（目の奥のかゆみから始まって、だんだん目の玉が痛くなり、目をつぶると余計に痛い。）も始まりました。

同年9月頃から幻覚（色が変わって見えたり壁に虫が這っているように見えたりする。）があり、ときどき不随意運動、頭痛も起きました。

10月には、足首、ふくらはぎ、膝の上、肘の下、足の付け根など、痛みがますます酷くなり、修学旅行から帰宅した後、発作が起き、その後痛みが倍増し、一日何回も痛み止めのボルタレンを飲むようになりました。高校へは、それまで何とか頑張って通学していましたが、10月後半から早退や欠席を繰り返してしまいました。

11月、便秘の薬を大黄甘草湯とガスモチン錠に変えて、やっと効きめが出て、薬と時々浣腸でコントロールできるようになってきました。

#### 11 新たな症状

平成26年末、インフルエンザA型にかかったときは薬を飲まずに5日ほどで治りましたが、高熱が治まると痛みもなぜか一時良くなりました。

その後は、平成27年1月後半からまた痛みが復活しました。新たな症状として異常にだるくなり、寝返りも打てず、目玉も動かせない、片手すらも挙げられない状態になりました。身体が硬直し、発語できませんでした。

ほかに、学校にいるとき、突如悲しみの感情に襲われる発作がときどき起こるようになり、その場にいられなくなって教室を出て、別室に移ったりしました。

今も、痛み、あざ、ニキビ、生理不順は続いています。

#### 12 ワクチンに対して思うこと

ワクチンについては「こんなものなければよかった」と思います。「ピンクのお手紙が来なければ、打たなかった。国が助成するくらいだから、いいワクチンと思った。」と母は言っています。子宮頸がんを完全に予防するのではないこと、ワクチンを打ってもがん検診は受けなければいけないことなど、全く知りませんでした。国は承認する際には、きちんとワクチンの危険性を調べて欲しかった、と思います。

## T-26番 要約

(平成26年9月現在)

### 1 被害者

平成10年12月生。接種時中学1年生（13歳）、現在15歳。埼玉県在住。

### 2 ワクチン接種前の健康状態等

健康。朝5時半に起床し6時10分には家を出て登校。通学時間は片道1時間半。部活の練習を終えて、帰宅は夜7～8時。入通院歴は風邪くらいで特に既往症もなし。

### 3 接種

サーバリックス3回（平成23年9月15日、同年10月18日、平成24年3月17日）

### 4 経過概要

平成23年9月 中学校（私立女子校）の入学後懇談会で接種を勧められ、公費助成期限の9月に1回目接種。接種後1～2週間腕が腫れ、腕が上がらない。

平成24年3月末 3回目接種後2、3週間で、倦怠感、すぐ寝るなどの異常現れる。

4月 体調異変（肩首の痛み、頭痛、倦怠感、手足に力が入らない、手足の震え）。血液・CT検査では異常なし。4月は学校をほとんど欠席。

5月～ 登校。人と関わるのが鬱陶しく感じる。気力低下。

平成25年4月 中3からは人混みが辛く、時間をずらし登下校。保健室登校。頸部疼痛、頭痛のほか、痙攣、過呼吸、視力低下、生理痛悪化。

秋頃～ 記憶障害、計算障害、読書も困難。関節痛、足に力が入らない。

12月 子宮頸がんワクチン接種後高次脳機能障害の診断

平成26年1月～ 歩行障害。体の痛みとだるさで朝起きられず、殆ど登校できない。

3月 入院しステロイドパルス治療を受けるが激痛のため1クールで中止。

### 5 これまでに発症した主な症状

関節痛、移動する痛み、頭痛、頸部痛、だるさ、痙攣、動悸、過呼吸、運動麻痺（足に力が入らない）、感覚麻痺、握力低下、脱力、生理痛悪化、耳鳴り、音・光に過敏（羞明）、視力低下、歩行障害、高次脳機能障害等

### 6 受診医療機関

6医療機関（小児科、心療内科、ペインクリニック、精神・神経科、てんかん専門病院、整骨院）

### 7 現在の生活状況

学校至近に部屋を借りて、平日は父と生活し、電動車椅子で通学。体調により休みがち。午後からの登校の場合もある。

### 8 救済制度の申請 申請していない

## T-26番 (埼玉県)

(平成26年9月現在)

### 1 はじめに

私は、現在高校1年生で、中学1年生の時にサーバリックスを3回接種しました。今までとても健康で、家から片道1時間半かかる学校へ通うため、早朝に起きて登校し、学校では毎日部活動をして、夜7～8時などに帰宅する生活だったのに、3回目の接種を受けた2、3週間後から、全身のだるさ、肩や首の痛み、頭痛など体に異常が現れ始め、具合が悪くて、学校に行けなくなりました。現在では、歩くのが難しくなり、車いすで生活しています。

身体の症状だけではなく、朝食べた物や昨日何をしたかを思い出せなくなったり、以前はすぐにできた二桁の計算ができなくなったりもしています。本を読んでも内容が頭に入っていないので、大好きだった読書ができなくなりました。

接種してから今までの症状や、生活の状況について、以下に述べたいと思います。

### 2 ワクチン接種前の健康状態

私は、小さい頃から入院を要するような大きな病気は経験したことはなく、アレルギーを指摘されたこともなく、健康に問題はありませんでした。

あえていえば、風邪を引きやすく、近くの病院にはよくかかっていたのですが、小学校6年生で中学受験をするときには、塾にも通っていましたし、夜遅くまで勉強をして、受験を無事クリアしました。私立の中高一貫校に入学してからは、毎日早朝に起きて片道1時間半かけて通学していました。電車の中では本を読み、駅から学校までは、15分の道のりを歩いて通学し、放課後は部活で、帰宅は夜7時から8時頃で、その後宿題や勉強をしてから寝るといふ、けっこう体力のいる毎日を楽しんで過ごしていました。

私はもともと穏やかな性格で、あまりイライラすることや怒ることがなく、4歳下の弟にも優しい姉ととらえられていたようです。

### 3 ワクチン接種時の状況

#### (1) ワクチン接種のきっかけ

私の通っている学校は私立の中高一貫の女子校です。入学した当初、学校の保健部から子宮頸がんワクチンを受けるように勧める手紙をもらいました。入学後最初の懇談会に母が出席したところ、製薬企業が作っているワクチンのパンフレットが配られました。学校が勧めているし、公費助成がされるくらいお薦めのワクチンなのだから、受けなくてはいけないものなんだと受け止めました。パンフレットにはワクチンの効果の説明はありましたが、副反応の説明は、書いてありませんでした。

9月に、母が保護者どうしの会話の中で、ワクチンの話題になり、公費助成を受けるためには9月までに第1回目の接種を受けなければいけないと思いだして、9月中にということで、自宅の近くのAクリニックに、接種をしに行きました。

#### (2) 接種時の状況

私は、平成23年9月15日(当時12歳)、同年10月18日(当時12歳)、平成24年3月17日(当時13歳)の3回、サーバリックスを接種しました。3回ともAクリニックで受けました。祖母と一緒にいき、クリニックで予診票をもらって記載し

ました。接種前に、医師から特別な説明はありませんでした。人によっては打ったところが痛くなって腫れると言われましたが、既に周りの友達も受けていて、痛いと聞いていたので、特別なこととは思いませんでした。

接種後1、2週間くらいは、打ったところが腫れ、痛くて制服が着られず、注射を打った方の腕にかばんを提げられなかったり、腕が上がらなくて電車のつり革を持てなかったりしました。また、夜寝ているときも、打った方の腕が痛くて、そちらを下にして寝ることができませんでした。これらは、3回とも、同じような状況でした。

#### 4 最初に気づいた体の異常、それからの症状・受診の経過

##### (1) 最初に気づいた体の異常

3回目接種の2、3週間後、関西へお墓参りに行ったとき、いつもは楽しい新幹線の旅行なのに、体がだるくて、「行きたくない」「何で今行かないと行けないの?」と言いました。母は、今思うとこのときから何かおかしかったと言っています。

新幹線の中だけでなく、短時間の在来線でも、座ると寝ているような状況でした。寝たいわけではないのに、気づくと寝てしまっていました。短時間でも寝てしまうので、家族に驚かれました。そのときは、とにかくだるくて、放っておいてほしい、関わってもらいたくないという気持ちでした。

##### (2) 中学2年（平成24年）の4月

新学期になる頃、朝起きるのが辛く、具合が悪くて、学校へ行きたくても体がついていかない状態になりました。頭が痛くなり、首や肩がパンパンに腫れ、肩こりの酷いものといった感じでガチガチで、ひどく痛みました。母が首や肩を触ろうとするのですが、痛くてたまらず、触れられそうになると逃げてしまうくらいでした。手足に力が入らず、手足の震えもありました。

地元の総合病院（B病院）の小児科で、血液検査やCTなどを受けましたが、異常はないとのことでした。それで、「異常がないなら学校へ行かないと」と、母やみんなに怒られて、「何でこんなに具合が悪いのに、学校へ行かせようとするの?」と辛く思いました。母は、精神力がないのだろうか、でもそんな子じゃないのにおかしいなと思っていたようです。

中2の4月は全く登校できなくて、5月から何とか行くようになりました。体調が良くなったわけではありませんでしたが、家にいると怒られるから無理して行っているという感じでした。

##### (3) 中学2年（平成24年）5月からずっと異常が続く

体の不調はずっと続いていました。自宅のそばの祖母の家にいるときに、全身痙攣が起こり、祖母が仕事上の母に連絡し、母が駆けつけると、痙攣は止まっていたということも何度かありました。痙攣は5分くらいは続くのですが、意識はありました。

はじめはなかった関節痛も出始め、生理痛もひどくなりました。子宮を絞られているような痛みで、生理前のイライラも生じるようになりました。生理不順もありました。

目の玉を動かしても頭の中に激痛が走るほどの頭痛も多く、頭痛があるときは耳鳴りもひどく、光や音も気になります。

学校へ登校しても、人に話しかけられるのも嫌で、人付き合いも悪くなっていたと思います。人と話していても上の空というか、友達の話をちゃんと聞いているつもりなのに、「今聞いてなかったでしょ?」と言われることもありました。

あまり怒らない性格なのに、なぜかいつもイライラしていました。登下校の電車の中ではすぐ寝てしまい、大好きだった本も読めませんでした。気力が湧いてこないというのもあって、中だるみの「中2病」なんだなと思っていました。

学校へ行けないときは、学校へ行きたいのに行けなくて涙が止まらないときもありました。

(4) 中学3年（平成25年）－秋頃から殆ど登校できなくなる

中学2年の3月下旬からは、過呼吸症状が起こるようになりました。動悸、痙攣など、身体の不調はますます悪化していました。動悸がするようになったのは、いつ頃からはっきり覚えていませんが、過呼吸と同じ頃だったかもしれません。

中学3年になり、人混みに耐えきれなくなり、混んでいる時間を避けて遅刻や早退をさせてもらえるように、学校に相談しました。そのような許可は、診断書がなければできないと言われて、C大学病院心療内科に行きました。4ヶ月間、計5回くらい通いました。睡眠障害、パニック障害と診断され、薬（セディール錠、ジプレキサ錠、ドグマチール錠）を処方されました。眠くなる作用があると言われていた薬の作用が強くて、駅のホームで眠り込んでしまったりするので、量を4分の1に減らして飲んでいました。一日中意識がもうろうとしていましたが、それは薬のせいと思っていました。

心療内科で診断書をもらったので、学校からは遅刻を許可されました。でも登校しても、クラスに行けず、保健室登校をしていました。音が騒がしくて辛く感じて、人の中にいることは無理でした。

中学3年の秋に、母に「最近おかしいんだよね。忘れちゃうんだ」と話しました。なんだか頭がぼーっとしたり、記憶力が落ちて、朝何を食べたのか、昨日何をしたのかなどが思い出せないようになっていました。

ほかにも、それまでは問題のなかった二桁の計算がぱっと出てこなくなったり、本が読めなくなってきたりしました。読んでも頭に入らない上に、途中で止めてもう1回読み始めると、前の内容を忘れてしまっていて、思い出せないのです。それで大好きだった本が読めなくなりました。これは、今まで一番辛いことの一つです。

中3の秋頃からは、ほとんど学校に行けなくなりました。少しでも外に出るようなという意味もあって、祖母が駅前の整骨院のマッサージに毎日連れて行ってくれました。ただ、ほとんど効果は感じませんでした。

視力も落ちて、中3で眼鏡を作りました。中2の時に視力が2.0あったのに、中3の時には0.4くらいに下がっていました。光がまぶしくて、外出するときにはサングラスが欠かせませんでした。

足がむずむずする感じや関節痛もあり、足に力が入らず歩いていても足が地に着く感覚がありません。痛む場所は時によって移動し、太腿の表面だったり側面だったりします。

手は握力がなくなり、一桁台になりました。よく物を取り落としますし、ペットボトルのふたが開けられなくなりました。感覚も鈍くなり、手に熱い物を持っても、すぐに熱いと感じられず、しばらくして「あ！いけない！」と気づいたりします。

そのほかに、ものを食べると胸がむかむかして気持ちが悪くなる症状があります。「食べなければよかった」と後悔するのです。

中学3年の秋頃には、特に食べる量は増えていないのに、急に体重が増加したことがあります。5キロくらいは増加したと思います。

(5) 子宮頸がんワクチンとの関連に気づく

中学3年、平成25年の9月頃、祖母がテレビを見ていて、子宮頸がんワクチンの被害を知り、「似ている症状の子がテレビに出ている。これじゃない？」と知らせてくれました。祖母が被害者連絡会に電話して、ワクチン接種との関連性に気づきました。

5 厚労省指定病院での対応

そのすぐ後、厚労省の指定病院が発表されたので、母が電話をかけて、いちばん早く予約の取れた、D大学病院へ予約を入れて、11月に受診しました。

S先生は、話はよく聞いてくれましたが、検査をしたり治療法を調べたりはしませんでした。先生は、「痛いつて思うから痛い。」「痛みを我慢して体を動かすことによって、いつしか痛みよりやれることが増えていくんだよ。」「昨日よりも今日、今日よりも明日とどんどん目標を課して、超えていって下さい。頑張ってください。」等と言うだけでした。

母が「こんなに痛いというのだから、どこかおかしいですよ。」と聞いても、「いえいえ。ワクチンとの因果関係はわかりませんから。」と言い、母が「厚労省の指定病院に選ばれていますよね、だから、何するのか対処の仕方とかガイドラインとかないのですか。」と聞くと、「一応ありますよ。」と言うだけで、「今聞き取った内容は報告しておきます。また様子を見せてください。次の予約はいつにしますか？」と言いました。

後で母に聞いたところによれば、S先生が「お嬢さんだけに聞きます。」と言って、私だけ診察室に残って話をし、次に母と入れ替わったとき、S先生は「学校に行きたくない理由はほかにあるみたいなんです。お嬢さんに『もしこの痛みがなくなったら何したい？』と聞いたら、『学校とか友達と遊んだりとか』、と言った。学校『とか』って言ったんです。普通は、学校『に』行きたいって言うんですよ。『とか』ってことは、ほかに何かあるんです。」と言ったそうです。私は、学校にも行きたいし友達とも会いたいし、と話したのに、学校に行きたくない気持ちのせいでこのような体の症状が出ているみたいな決めつけ方をされて、とても不愉快でした。また、「お母さんの思いがお嬢さんに影響しているんです。」とも言われたそうです。

一応、次の診察の予約は入れましたが、こんなふうに医療機関が情報を集めているだけで、しかも精神的なものだと決めつけて、私にとっては学校を休んで無理して行っても何の意味もないので、両親と相談して、次の診察の予約は取り消しました。D大学病院で大量に処方された痛み止めのカロナールは、全く効きませんでした。

患者は、体が痛くて具合が悪くて、治してもらいたくて病院に行くのに、その期待は全く裏切られました。こちらから「ワクチンの関係ではないか」と言わなければ、先生の対応は違ったのかな、と思います。

6 中学3年秋（平成25年）から今年（平成26年）の状況

(1) 国立精神・神経医療研究センター受診

D病院では、ワクチン関連の症状という診断書を書いてもらえなかったもので、翌月、個人的な紹介で国立精神・神経医療研究センターに受診しました。

先生からは「ワクチンが原因だとは特定できない。」と言われましたが、「ワクチン後の体調異変」という診断書を書いてもらいました。

D病院へは、診断書をもらいにしか受診していません。その後は通院していません。

(2) 今年に入ってから車椅子を使うようになる・現在の生活

中3（平成25年）の秋から、足など関節の痛みはありましたが、今年（平成26年）1月、足に力が入らなくなり、杖を買ってもらいました。1、2回、学校へ杖について行ったのですが、手が痛くなってしまって無理なので、車椅子を買って欲しいとお願いしました。最初は2月に簡単な手動の車椅子を買ってもらいましたが、自分では力がなくて漕げないので、何回か家族に付き添ってもらって、電車に乗って登校したこともありました。

中学は何とか卒業したものの、ほとんど学校に行けず、これ以上電車通学は難しいので、高校の入学式の前日に電動車椅子を借り、さらに両親が学校のすぐそばにマンションを借りてくれました。家財道具一式を揃え、お金がかかりました。

5月から、平日は、私と父がマンションで生活し、私は電動車椅子で通学し始めました。できるだけ学校には行きたいので、体の調子次第で、行けるときは2時限目からでも、3時限目からでも登校しています。

電動車椅子の費用は、障害者手帳を申請し、認定があれば補助が出ると聞きましたが、障害等級5級だったので、何も補助はありませんでした。レンタル費用は月に2万円以上かかっているそうです。

(3) てんかんセンターでの入院治療

被害者連絡会の掲示板で、炎症を抑える点滴治療のことを知って、今年の3月、静岡のてんかんセンターで検査入院1週間、卒業式を挟んで、また点滴治療に1週間入院しました。検査入院では、血液検査、髄液検査、脳波検査、心理検査、MRI、スペクト、記憶検査等を受けました。後半の1週間の入院中に、これらの検査結果が出て、「子宮頸がんワクチン接種後高次脳機能障害」という診断を受けました。

しかし、ステロイドパルス治療を受け始めて、3日目まではよかったです。4日目から顔に湿疹がものすごく出て、顔がりんご病のように赤くなり、痛みが今までで最高になりました。洋服が接触しているところがすべて痛い、椅子に座っていると座面に接しているところが痛いなど、痛みがものすごく出てしまったので、もともと先生はステロイドパルスを2クールか3クールやりたいと言っていましたが、1クールで中止してもらいました。期待していたので、効果が出ず残念に思いました。

入院中は、母が仕事を休んで、駅前のホテルに泊まり込んで付き添ってくれました。てんかんセンターでの治療にも、かなりお金がかかったそうです。

(4) 現在の治療、生活

ステロイドパルス治療は止めましたが、その後も1回てんかんセンターに通院し、そちらの先生に、「経験的に効くことがあるのでオノン服用してみないか」と言われ、飲んでます。ほかにはビタミンB、Cのサプリメントを飲んでます。

7 ワクチンに対する思い

いろんな意見があり、どれが正しいのか言えないし、自分でもはっきりとはわかりませんが、こうして私がこういう体になったという事実はあるし、身近な同じ学校の先輩も同じようにワクチンのあとに辛い症状に苦しんでいます。じわじわ被害者の数は増えているし、こういう事実があるのを厚労省や医師が認めないのは、どうなのかなと思います。



世間では、なかなかワクチンの影響での症状とは信じてもらえず、学校では少しずつ理解してもらっていますが、私は特別扱いをしてほしいわけではない、なるべくみんなと一緒にしたいと思うけれど、みんなと同じにできないことも少なからずあって、そういうことを正しくわかってもらうには、広くみんなにワクチンの被害を知ってもらうことが必要だと思いますし、厚生労働省が副反応被害をきちんと認めてくれれば、周りの人々も納得するだろうと思います。

## T-29番 吉川佳里 要約

(平成26年10月現在)

### 1 被害者

平成12年1月生。接種時中学1年生(12、13歳)、現在14歳。神奈川県在住。

### 2 ワクチン接種前の健康状態等

入通院歴、服用歴、アレルギーのいずれもなし。通常に通学し、明るく、運動好き。姉妹でダンスを習い、発表会に向けて練習をしていた。

### 3 接種

サーバリックス3回(平成24年9月8日、同年10月10日、平成25年3月8日)

### 4 経過概要

- i) 平成24年、自治体や学校から接種を勧める案内が届き、無料であることや周囲も既に接種していたことから、9月以降接種を3回継続。
- ii) 平成24年12月、2回目に接種から2ヶ月後に突然の過呼吸、3回目の接種から4ヶ月後の平成25年7月にも激しい過呼吸で救急搬送。
- iii) 平成25年9月、ある日突然、足の脱力、歩行障害、手の震え、不随意運動、視野狭窄、聴力過敏が起こり、以後ほとんど歩けなくなる。
- iv) 平成26年1月、検査入院の退院後、記憶障害が始まる。友人の顔も、クラスの間所も、漢字、ひらがな、数字も分からなくなる。
- v) 各種検査を受け、右脳の血流が低下しているとの診断を受ける。身体障害者手帳の2級を取得する。

### 5 これまでに発症した主な症状

全身の関節痛、頭痛、腹痛、疲労感、だるさ、不随意運動、意識を失う、過呼吸、運動麻痺、感覚麻痺(味覚、嗅覚)、脱力、生理不順、不正出血、視野狭窄、歩行障害、めまい、耳鳴り、記憶障害、眠れない、突然眠る、体重減少、食欲不振、嘔吐、便秘、不安感、口中や頬など顔の痺れ、喋りにくい、視界がぼやけ物が見えにくい

### 6 受診医療機関の数・診療科

12病院(小児科、神経内科、眼科)

### 7 現在の生活状況

基本的に前記5の症状が続いている。夜就寝するが、15~30分寝て起きることの繰り返し。朝起きれず、10~11時間に朝食をとるが、食欲不振で量は以前の半分以下。通学出来ず、一日自宅に居る。夜は食べるが毎日嘔吐してしまう。最近では体重減少に伴い体力も落ちて吐く力がなく、嘔吐できず気持ち悪さがずっと続く。

### 8 救済制度の申請 申請していない

## T-29番 吉川佳里 母（神奈川県）

（平成26年10月現在）

### 1 接種前の生活

私は、現在14歳になる娘、吉川佳里(よしかわかいり)の母親です。娘は平成12年生まれで、現在中学3年生になります。娘は、子宮頸がんワクチンであるサーバリックスを接種する以前、特に大きな病気をしたことはなく、入通院歴、服用歴、アレルギーはありません。また、娘は、たまに風邪などをひいて欠席する以外は、基本的には毎日、元気に学校に通っていました。娘は小さい頃から運動が好きでしたので、妹と一緒にダンスを習っており、発表会に向けて一生懸命練習していました。

### 2 接種のきっかけと接種直後の症状

娘は、中学1年生の時、初めて子宮頸がんワクチンであるサーバリックスを接種しました。娘の周りの友達も皆既にワクチンを打っていたようで、娘が友達から「まだ打っていないの?」と聞かれると言っていたことや、母親である私も、娘の友達のお母さん達から「もう打たせたわよ。」等と聞いていたので、普通、打つものなのだと認識していました。また、娘の学校から2回程、市からは3回程、子宮頸がんワクチンの接種を勧めるお知らせが届いたこと、そこに期限内ならば無料で接種できると書かれていたことも、接種を決めるきっかけとなりました。

娘は、平成24年9月8日、同24年10月10日、同25年3月8日の計3回、サーバリックスを接種しました。接種を受けるにあたり、医師からこれがどのようなワクチンなのか、どのような副作用が出る可能性があるのか等、口頭での説明は一切ありませんでした。1回目の接種の時、サーバリックスについての説明文書を渡されましたが、ただ渡されただけで、その記載内容についての説明はありませんでした。なお、接種を受けることについての同意書には、3回の接種の毎回サインをしていました。

接種時の痛みについて、娘は、普通に注射針をさされたとき以上に痛かったと言います。ただ、娘自身、学校のお友達から「すごく痛いよ。」と聞いていたので、私も娘も、痛みについてそれほど気に止めることはしませんでした。注射した腕の痛みが一週間程続いた他、注射部位の腫れ、しこりも同じく一週間ほど続きました。

### 3 接種後の症状経過

#### (1) 最初に起こった身体の異変

接種時の痛み、腫れ、しこり以外で、初めて娘に起きた身体の異変は、2回目の接種から約2ヶ月後の、友人宅での過呼吸でした。平成24年12月5日、娘が友人宅に遊びに行っていた際、夕方、大きめの地震が起こったのですが、その直後、娘が突然過呼吸になったのです。友人のお母さんが娘の口元にビニール袋をあてて下さり、そのときは数分ほどで症状は落ちついたようでしたので、帰宅した後も病院に行くことはしませんでした。

#### (2) 今までにない過呼吸の出現

平成25年7月、自宅にいたところ、娘が突然今までにない過呼吸になり、救急車で東海大学大磯病院に搬送されました。救急担当の医師からも、「過呼吸症状である。」と言われ、病院で症状が落ち着くのを待って帰宅させました。

### (3) 足の脱力と歩行障害、手の震え、視野狭窄、聴力過敏

平成25年9月12日、娘が学校での体育祭の予行練習中に突然倒れたとの連絡が入り、急いで学校まで迎えに行きました。娘が言うには、突然足の力が入らなくなって立ってられなくなり、手も震えて、視野も急に狭くなったとのことでした。娘は保健室に運ばれていましたが、その時は先生の肩を借りればなんとか歩行可能だったようです。ただ、一向に手の震えが止まらないため、帰宅させそのまま近所のとうじょう小児科に連れて行きました。医師から熱中症の可能性があるとされ点滴を打ちましたが、全く手の震えが治まらないため、医師から「平塚共済病院に行った方がよい。」とされ、そのまま同院に連れて行きました。

平塚共済病院では、血液検査、CT検査等を受けましたが、医師からは、異常なしと言われました。医師から「このまま帰宅してよい。」と言われましたが、娘の手の震えが治まらず、歩き方も膝が安定せず不安定で心配でしたので、入院させて欲しいと伝え、小児科に入院することになりました。

次の日、娘は心電図検査を受けました。寝たままの状態での心電図検査は行えましたが、階段を上りながら等運動しながらの心電図検査は娘が歩けないため実施できず、次の日も試みましたが、やはり歩行自体ができないため断念をしました。また、握力を測ろうとしましたが、手で握力計自体を握れず、結果は「握力ゼロ」でした。MRI検査も行おうとしましたが、娘の聴力が敏感になっており、機械音に耐えられず、実施することができませんでした。

入院から一週間後、担当医から何の説明もなかったため、こちらから医師にお伺いをしたところ、「精神的なものだ。」と言われました。娘の手の震えは入院から2週間ほどして治まりつつありましたが、十分な検査も行えず、ただ「精神的なもの」と結論付けられたことに納得がいきませんでした。私から「子宮頸がんワクチンの副反応ではないか。」と尋ねましたが、医師は「それは絶対はない。」と言い、精神科への転院を勧めました。転院と言われても、他院の思春期精神科は3ヶ月待ちと聞いており、どうしてよいか途方に暮れてしまいました。ただ、このまま平塚共済病院に入院させるべきではないと判断し、同年10月2日、娘を自主退院させました。翌日、精神病院である愛光病院を受診しましたが、精神的なものだと言われました。

平塚共済病院への入院時点で、娘は足の脱力から10歩程しか歩けなくなっていました。同院を退院した時点では車椅子で、以後、室内以外は完全に車椅子を使うことでしか移動ができなくなりました。また、手だけでなく上半身や足も自分の意思と無関係に動いてしまう不随意運動が出るようになり、最大で13時間続くこともありました。不随意運動が出た後、娘は体力を奪われぐったりと疲れてしまい、筋肉痛と共に、身体にビリビリした感じが残ると言います。

### (4) 病院に助けを求める日々

平成25年10月4日、娘は北里大学病院の小児科を受診しました。またしても、「精神的なもの」と言われ、子宮頸がんワクチンの影響ではないかという問いには、あっさりと「違います。」と言われました。

同年10月6日の夜8時頃、娘にまた過呼吸症状が起き、平塚共済病院で処方された薬を飲ませましたが治まらず、救急車を呼びました。救急隊員からは、「これは過呼吸ではない。」と言われ、以前入院した平塚共済病院に搬送されそうになりましたが、娘が同院への不審からどうしても嫌だと言い、東海大学付属病院に搬送されました。しか

し、救急担当の医師から、またしても「精神的なもの。」と言われ、そのまま帰宅させられました。

同年10月9日、娘が休みがちになっていた学校にどうしても行きたいと言い連れて行きましたが、すぐに過呼吸症状が起きてしまい、午前中保健室で休ませて、一緒に帰宅しました。

同年10月15日、平塚共済病院の紹介状を持ち東海大学病院に行きましたが、受付で「違う病院に行ってください。」と言われ、診察を拒否されました。そこで、地元の医院に連絡し受診を希望しましたが、「車椅子の方は受け入れられません。」と言われ、受診をすることができませんでした。

同年10月末、娘が風邪をひいた為、とうじょう小児科を受診した際、医師に娘の過呼吸や歩行障害等の症状について、再度、「ワクチンの影響ではないか。」と尋ねましたが、「ありえない。平塚共済病院に任せておけば歩けるようになる。現代病のようなものだ。」と言われました。

この頃、娘は通学を試みては学校で体調を崩し私が迎えに行くということの繰り返し、まともに授業を受けられるような状態ではありませんでした。

#### (5) 子宮頸がんワクチン被害者連絡会への登録と病院の紹介

平成25年11月8日、私は、友人より子宮頸がんワクチン被害者連絡会があると聞き、登録しました。そして、同年12月6日、被害者の会からの紹介で、横浜市立大学附属病院の小児科を受診しました。診察を希望していた医師が出張中で不在だったため、別の医師に診てもらったところ、子宮頸がんワクチンの副作用の疑いがあると言われました。

同年12月10日、横浜市大学附属病院の小児科を再度受診し、診療を希望していた医師に診察をして頂いたところ、結果は、「若年性繊維筋痛症」ではないかという診断でした。

#### (6) 検査入院

平成25年12月27日、娘は信州大学医学部附属病院を受診し、血液検査、心電図検査を受けました。そして、年明けに検査入院をすることが決まりました。平成26年1月7日、娘は同病院に入院し、心電図検査、胸部レントゲン、針筋電図、尿検査、血液検査を受けました。娘は入院中、激しい股関節の痛みで寝られず、痛み止めを服用しましたが軽減することはなく、痛みから眠ることもできず、泣いて過ごす日々が続きました。

#### (7) 記憶障害の発生

平成26年1月17日に信州大学医学部附属病院から退院し、娘は徐々に学校に行きました。そうしたところ、娘は、自分のクラスの場合、同級生の名前、顔が思い出せないと言います。字も思い出すことができないと言い、漢字だけでなくひらがなですらまともに書けない状態になりました。これまで娘には様々な症状が出ていましたが、ついに記憶障害が始まったのかと、愕然としました。以後、娘はまともに通学することができなくなりましたが、学校に行っても、教材を使ってひらがなの字を練習したりする程度で、授業を受けたりしてや試験を受けることなど到底できませんでした。

#### (8) 副作用との診断と、再度の検査入院

平成26年3月26日、霞ヶ関アーバンクリニックを受診し、受診後、慈恵医大病院を紹介され、同院で検査入院することになりました。

慈恵医大病院では、髄液採取、脳波検査、握力検査、MRI、胸部レントゲン、心電図検査を受けました。その結果、右脳の血流が低下していると診断されました。

#### 4 現在の状況

娘は、平成26年4月30日に学校に登校し意識を失って大学病院に運ばれて以降、通学していません。生活は、夜寝て起きることの繰り返しです。ただ、夜も15分から30分ほど寝ては目が覚めることの繰り返しなので、まともに睡眠をとることができません。その結果、朝は起きられず、日中も突然眠り出すことがあります。

娘の症状は、これまで述べたことに加えて、微熱、下肢冷感、耳鳴り、口中や頬など顔の痺れ、通常の腹痛ではないグリグリ押し潰されるような痛み、生理不順、不正性器出血などがあります。現在でも、不随意運動、全身の痛み（関節痛）、意識喪失、疲労感、運動麻痺、歩行障害、脱力、視野狭窄、喋りにくい、記憶障害、吐き気、嘔吐の症状が続いています。なお、娘は現在、身体障害者2級の認定を受けています。

娘は、平成26年3月から7月の間に7キロも体重が落ちました。理由は、食欲不振と、食べ物の臭いだけで吐き気が起こり、実際食べると吐くことの繰り返しだからです。ただ、最近筋力も弱って吐く力もないようで、気持ち悪さを抱えながら、「どうやって吐けばいいの。」と聞いてくるほどです。

記憶障害も進行していて、最近ひらがなでも自分の名前しか書くことができません。1から10の数字を数えることもできません。病院で見た「エレベーター」の文字の意味も分かりません。プリクラを見てもお友達の顔を思い出すことができません。これが、14歳になる娘の現状です。

#### 5 心情、要望等

娘の体調の変化は信じがたいものであり、現在、県外の病院に車を使って通院している状況です。当然、診察費、交通費、ホテル代等の出費があります。日常でも、私が娘の側を離れることができない結果、スーパーに買い物に行けず近所のコンビニで野菜を買うこともあるなど、様々な所に経済面での影響が出ています。

娘は、このワクチンはなくなって欲しいと言います、他にこのワクチンで苦しむ人を出したくないと言います。母である私も同じ気持ちです。国は、このワクチン接種を無料にして皆に接種を勧奨しましたが、結局検診をしなければ子宮頸がんワクチンは予防できないと言います。そうであれば、ワクチンを有料にして検診を無料にすべきです。効果の高くないワクチンを接種した結果、娘のような身体になる人が一人でも出るとすれば、少なくとも現状その可能性が排除できないとすれば、このワクチンは今すぐ中止すべきです。

## T-31番 要約

(平成26年10月現在)

### 1 被害者

平成11年12月生。接種時中学1年生(12歳)、現在14歳。

### 2 ワクチン接種前の健康状態等

健康。花粉症だが、服薬はほとんどせず。欠席は年1～2回程度。中学入学当初はバスケットボール部に所属し、土日も練習や遠征。

### 3 接種

ガーダシル3回(平成24年9月24日、同年11月2日、平成25年3月18日)

### 4 経過概要

平成24年4月 学校で、地元の保健師からHPVワクチンについて説明あり。

夏頃 接種せずにいたところ、自治体から接種するようにとのハガキが届く。

9月 1回目接種(1回目は目立った異常なし。2回目後疲労感あり)

平成25年3月 3回目接種後に、部位が腫れ、かゆみが継続(病院でかゆみ止め処方)。

4月頃 毎日鼻血が出る。続いて、顔面蒼白、血圧低下、食欲減退、吐き気、激しい頭痛、過度の疲労感などの症状発現。

5月 白血病の疑いを持ち総合病院で検査するも、起立性低血圧との診断。

11月頃 接種した腕(左)が重くなり、痛みが出始める。

～ この間、体調が短期間で上下し、改善せず

平成26年4月 服薬しても効果がないほどの生理痛が始まる。自室で無言でボーっと座っていたと思うと、突然泣き出す。移動する痛み。

### 5 これまでに発症した主な症状

関節痛・移動する痛み・頭痛・背部痛、腰痛・疲労感・だるさ・心臓がドキドキする・めまい・気分がすぐれない、落ち込む・気力が出ない・不安感・異様に眠い・体重減少・痩せた・食欲減退・吐き気・激しい生理痛・低血圧・鼻血・顔面蒼白・腸の調子が悪い・情緒不安定

### 6 受診医療機関

3医療機関(内科、小児科、神経内科)

### 7 現在の生活状況

一応通学はしているが、体調によっては授業を受けられない日もあるため、勉強が遅れ気味。外出をしても、帰宅後の疲労感が激しく、倒れるように眠ってしまう。

### 8 救済制度の申請

申請していない。

## T-31番 母 (甲信越地方)

(2014年10月現在)

### 1 接種前の状態

私の娘は、平成11年生まれで、現在14歳です。

接種前の健康状態については、年1~2回風邪などで学校を休む程度で、大きな病気はもちろん、入院もしたことがない健康体でした。ここ何年かは、毎年4月や9月頃になると花粉症の症状が出ていましたが、薬を飲む必要もほとんどない程度でした。

娘は、中学校に入学してからバスケット部に所属し、毎日遅くまで練習していました。また、土日には試合のために遠征することもありました。遠征に行くときには、朝5時頃に起床するのですが、寝起きが悪いということもなく、自分できちんと起きて出掛けていました。

### 2 接種のきっかけ

娘は、中学校1年生の時に、平成24年9月24日、11月28日、平成25年3月18日の計3回、子宮頸がんワクチンのガーダシルを接種しました。

私が、このワクチンのことを知ったのは、保護者対象の学年集会の時でした。この集会は、娘の中学校入学後に開催されました。保護者が教室に集められ、地元の保健師からワクチンの説明を受けたのです。説明の内容は、子宮頸がんの死亡者数など、がんの怖さを伝えられた後、それを予防できるワクチンができたこと、通常は任意接種で金額が高いが、今なら自治体から助成が受けられること、期間を過ぎると助成が受けられないことなどでした。特に、お金のことについて大きく取り上げた説明だったという印象です。副作用についての説明はなく、今まで接種してきたはしかなどの予防接種と同じようなものだと思っていました。

私は、当時ワクチンのことを知らなかったので、「そんなにすごいワクチンができたのか。」と驚くとともに、「うちの子には、まだ必要ない。」と考えていました。

ただ、周囲の親が接種させると言っていることもあり、予防接種の予約だけはしようと診療所に行きました。その診療所では、私の娘が初めてのガーダシル接種者だったとのことで、看護師が手を叩いて喜んでいました。その時に、看護師に「大丈夫なのか。」と聞いたところ「大丈夫、大丈夫」と返事がありました。

もっとも、予防接種後の注意事項として、一般的に激しい運動ができないということでしたので、バスケット部の練習との関係でキャンセルをしてしまいました。その後、接種をしないままだったところ、夏頃に、自治体から未接種者に対するハガキが届きました。自治体からお知らせが来たので、私は、再び予診票を取りに行き、接種を受けさせることにしました。

### 3 1回目と2回目の接種

接種は、近所の診療所で行いました。1回目と2回目の接種の際に、ワクチンについての説明を受けたことはありません。

接種後、特に目立った症状はなく、娘は、腫れや接種部位の痛みについて、インフルエンザなどの予防接種と同じくらいだったと言っていました。

もっとも、2回目接種後の12月に、娘が、何もする気がなくなった、部活をやめたいと言いました。それ以前にも、バスケット部で遠征に行く際も、送って行く車の中で終始



「眠たい」と言っており、どうしたのだろう、とっていました。

#### 4 3回目接種直後から発現した症状

2回目接種後から、しばらく接種をしないでしたところ、自治体から「3月末までに接種しないと、補助金が出ない」「3回打たないと意味がない」というような内容のハガキが届きました。そこで、慌ててまた診療所に予約をし、平成25年3月18日に3回目を接種させました。

3回目も、痛みは今までと変わりはありませんでしたが、直後から強いかゆみができました。かゆみは2週間以上続き、1日中ボリボリとかいていたので、接種した診療所に連れていきました。医師は、特にワクチンのことには触れず、かゆみ止めを処方されました。

これで、かゆみが収まると思いましたが、直後から一気にさまざまな症状が出始めてきました。

まず、毎日昼夜を問わず、鼻血が出るようになりました。初めは、アレルギーのせいかと思っていたのですが、ティッシュペーパーで鼻を押さえても、すぐに血で真っ赤になってしまうくらい出血量でした。また、鼻血のせい、血の気が全くなく、顔面蒼白で、学校へ行っても周囲の友達や先生から心配されるようになりました。この頃は、ワクチンの影響だとは少しも思わず、娘が白血病になってしまったのではないかととても心配していました。

さらに、ハンマーで殴られたような頭痛が毎日起こり、食欲もなくなり始めました。食べないと体に悪いからと、無理に食べようとすると吐き気がひどくなり、結局、ほとんど口にできない状態が続きました。

そして、学校へ通っても、帰宅してからの疲労感が激しく、すぐに横になってしまうような生活をしていました。

今まで、特に大きな病気をしたこともなかった娘に、何が起きているのかと不安に思う毎日でした。

#### 5 1か月半経過後

3回目を接種してから1か月半ほど経過した5月の連休以降は、これらの症状に加えて、過眠の症状が出てきました。

以前は、朝5時に起きるときできえ、きちんと目覚めていたのですが、通常の間になっても全く起きられなくなりました。私が、娘の部屋に起こしに行くと、今まで聞いたことのないようなガーガーといういびきをかき、白目をむいたような状態で寝ていました。やっと起こして、学校へ行っても、眠気がひどく起きていることができないため、2時限目から保健室で眠っていなければならない時もありました。その時も、いびきをかいて寝ている状態でした。

また、気持ちが悪くなり、吐き気も以前よりひどくなったため、給食も食べられなくなりました。学校給食では、残すことが難しいようでしたので、とてもつらい思いをしていたようです。その後、担任の先生に病状を話し、対応してもらえたので、娘も少しは気が楽になったようでした。

疲労感もさらに激しくなり、授業中に椅子に座って体勢を維持することも、全校集会などで体育座りをすることもできなくなりました。

この頃から、授業をまともに受けられなくなってしまったのです。

## 6 病院での検査

朝起きられなくなったことで、通学が困難になり、疲労感、ひどい頭痛や食欲不振・吐き気で日常生活を送ることも困難になりました。

そこで、総合病院の小児科を受診しました。以前から大量の鼻血が出ていたので、医師に対して、白血病かもしれないと伝え、血液検査をしてもらいました。娘は、病院の待合室でも座って待っていることができず、看護師さんの計らいで、隔離室のベッドで横になっていました。この時も、横になるなり、すぐにいびきをかいて寝てしまいました。その後、医師が来て、やっと採血室へ行ったものの、倒れこんでしまい、診察室に戻れずに、結果が出るまでそのまま採血室で寝続けていました。

検査の結果は、異常がなく、「思春期によくある起立性低血圧」と言われました。特に薬を飲む必要もなく、自然に治るとのことだったので、ひとまず白血病でないことに安心をし、帰宅しました。

しかし、症状が回復することもなく、通学は、家の車で学校まで送って行かなくてはならなくなりました。そして、やっとの思いで学校へ行ったとしても、体調が悪化して学校から呼び出しがかかり、迎えに行くことも多くなりました。帰宅後は、倒れこんでいびきをかいて寝てしまいます。娘は、その度に「疲れて死にそう」「眠くて目が開けられない」と言っていました。

このような状態では、まともに授業を受けることができず、勉強が遅れていってしまいました。娘は、このような状態になるまでは、まじめに授業を受け、宿題などもきちんとやっていました。私は、やりたくてもできない状況の娘を見ているのは、本当につらかったです。

## 7 4か月経過後（ワクチンの副作用の疑い）

7月になった頃には、両足首に関節痛も出始めていました。

私は、その頃から、娘の症状がワクチンのせいではないかと思い始めました。今まで見たことのない症状が、4か月くらいの間に次々と出始めており、ワクチン接種以外に今までと異なることをしたことはなかったからです。

私は、ワクチンで副作用が出た場合には、公共団体に窓口があるかと思い、連絡を試みたところ、特に設置されていないとのことでした。人に相談しようにも、周囲でワクチンを接種して具合が悪くなったという話を聞いたことがなかったので、私が娘の症状のことを話しても信じてもらえず、かえって嘘をついていると思われるかもしれないと思うと、なかなか話すことはできませんでした。また、この頃から、通学が困難になったので、車で送って行かなくてはならなくなり、日中も娘の体調が悪くなった時には、迎えに行かなくてはならなくなりました。私は、会社に勤めているのですが、会社にも娘の症状を話すことはできず、いつクビになるかもしれないという不安も抱えていたのです。そのような時、たまたま医師の友人に、娘の症状やワクチン接種のことを話したところ、窓口のある病院を知っているということでした。私は、すぐに連絡先を教えてもらい、7月9日に電話で予約をしました。予約日は7月末頃だったのですが、病院から連絡があり、「具合の悪いうちに診たい」ということで3日後に診察を受けることになりました。

当日は、血圧測定・MRI・血液検査を行いました。血圧は測定不能なほど低く、脳か

ら分泌される物質が出ていない、と言われました。しかし、私がワクチンの話をすると、「心配すぎるせいだ」とも言われました。

検査後に出された薬は、向精神薬等でした。しかし、服薬すると、眠くて起きていることができず、倒れるように寝てしまいました。量を調節して、半分にしても結果は変わらず、その薬をやめ、心臓の薬を飲むようになりました。

検査の結果、「起立性調節障害」と診断されました。ワクチン接種後の副反応との関連性もあるということで、副反応報告も出されたようです。

もっとも、ワクチンとの関連性があるという診断は出されましたが、娘の症状は改善しませんでした。日によって症状が軽くなったりすることはありましたが、1週間から10日ごとに体調に変化が現れ、とても安心していられる状態ではありませんでした。

また、11月頃からは、ピアノを弾く際に、接種した方の腕全体が重痛く、ピアノが弾けないと言い出し、半年ほど、腕が思うように動かなくなってしまう時期が続きました。

#### 8 約1年経過後（さらに新たな症状の発現）

これまでの間、まったく症状が改善しないまま、平成26年4月頃から、急に生理痛が激しくなりました。今までは、生理痛があったとしても、薬を飲むほどではありませんでした。しかし、4月頃からは薬を飲んでも効果がなく、起きていられないほどの痛みが起きました。また、経血の色も今までとは異なっていました。

さらに、太もも、足首、首、肩、腰などに、移動する痛みが発生し始めました。一旦痛みが出ると半日から1日は、痛みの移動に苦しんでいました。

#### 9 約1年4か月経過後（症状の悪化）

平成26年7月頃、再度症状が悪化してしまいました。

すぐに病院に行ったのですが、娘の症状がワクチンの影響だと知ってからは、薬剤を娘の体内に入れるのは躊躇するところであったので、栄養剤の点滴を打ってもらいました。

しばらくすると、娘は、最悪の状態からは少し落ち着いたのですが、看護師からは、「季節の変わり目だからでしょう」と言われ、医療関係者の理解のない言葉に親子ともに傷ついたのでした。

そして、この頃から、情緒不安定な様子が見られるようになりました。

ある日、私が仕事から帰宅しても、娘が居間にいないので、部屋をのぞいてみると、無言でボーっと部屋の中に座っていました。今まで、このような状態の娘を見たことがありません。私が驚いて、「どうしたの？」と聞くと、ボーっとしていたかと思うと、突然ワーワーと泣き出したのです。娘は、すぐに泣くような子ではなかったので、学校で何かあったのかと、心配し、少し落ち着いてから泣いていたわけを尋ねると、「何かあったわけではない。なんで泣いたか自分でもよくわからない、泣けて泣けて仕方がなかった」と答えました。

今までと異なる精神的な症状が出始めたことで、どうしてこんなことになってしまったのか、娘が元に戻らないのではないかと大変不安を感じていました。

#### 10 現状

夏頃の最悪の状態は脱しましたが、いまだに様々な症状が出ています。移動する痛み、異常な疲労感、情緒不安定、食欲減退、睡眠障害など、一見して他人に分かる症状でない

だけに、周囲の人に、本人や家族の苦しみが分かってもらえないのがとてもつらいです。

娘も、今まで普通に行っていた学校で授業を受けることや、給食を食べることなどができなくなったことが、非常につらかったのではないかと思います。

登校状況は、以前に比べると、休むことは少なくなりましたが、接種前の状態には程遠いです。夏休み前までは、毎日送迎が必要でしたが、少しずつ自分で歩いて学校に行くように頑張っています。

中学3年生になるにあたって、生徒会の候補者として推薦されたのですが、選挙演説当日も、眠気と疲労で起き上がれず、何とか午後の演説だけ出てほしいと、学校側に頼まれ、やっとのことで送って行くような状態でした。

また、4月には、娘がずっと楽しみにしていた修学旅行がありました。あらかじめ、友達には「うちの子は朝起きられないから、起こしてね。」とお願いしていたので、何とかみんなと一緒に参加できましたが、やはり睡眠障害や疲労感が激しく、バスの中ではほとんど起きていられず、同級生と行動するだけで精一杯だったようです。

さらに、娘は、今年、高校受験を控えています。昨年より欠席が多くなり、勉強についていけなかったため、現在、塾に通っています。娘は勉強がしたい気持ちがあるのですが、ひどい疲労感があるため、全部出席することはできていません。義務教育である中学校では、欠席をしても理解のある対応をしてくれています。しかし、高校に入ると、出席日数が足りずに留年、退学ということもありうるかと思うと、娘の将来がとても心配です。

また、私は正社員なので、頻繁に会社を休むこともできませんし、遅刻や早退もなかなかできません。できることなら一日中娘のそばにいて、少しでも良くなるように世話をしたいと思っています。経済状態からすると難しいことだと思います。今、会社には、娘がワクチンの影響で具合が悪くなっていることを話しておりますが、このままの生活が続くと、クビになってしまうかもしれないという恐怖もあります。

それから、娘は、現在、薬に代わるものとして生薬を飲んでいますが、これは、保険がきかず、かなり高額であるため、経済的負担が大きくなっています。祖母にも援助をお願いしなくてはなりません。

娘は中学1年生の3月に、高額なワクチンが無料になるからと、宣伝をされ、ワクチンを接種してしまいました。今まで、娘は、キャンプや登山に行き、体力を使い、夜遅くまで起きていたとしても、いつも元気一杯で帰宅していました。娘の健康だけには注意して育ててきたのに、突然このような状態になり、悔しい思いでいっぱいです。また、これまでの家族の生活も破壊されました。

早く治療法を確立し、長期的な補償と今までと同じ生活と健康な体を返してほしいと思います。加えて、ワクチンの被害を受けた子供たちが安心して学校に通えるように、欠席への対応や国民への周知を進めてほしいです。

## T-35番 要約

平成26年8月現在

### 1 被害者

匿名、茨城県在住。現在中学2年生（13歳）、接種時12歳。

### 2 ワクチンを接種する前の健康状態

1歳10ヵ月ころ、熱性けいれんあり。花粉症あるが、薬や食べ物に関するアレルギーはなし。小学4年生の時は皆勤、小学校高学年の時は年間2日欠席にとどまり、ほぼ皆勤であった。中学に入ってからにはバスケットボール部所属。

### 3 接種

ガーダシル2回（2013年5月28日、7月30日）

### 4 経過概要

（2013年）

小学校卒業間際、自治体からの通知で接種を検討。定期接種とのことで、当然のこのように接種させる。

5月28日（当時12歳）ガーダシル1回目接種 左右太ももに痛み。

7月30日（当時12歳）ガーダシル2回目接種 激しい痛み。

8月2日 食事が飲みこみにくい状態に。総合病院に入院（4日間）。

9月2日～ 腹痛

9月12日～ 腹痛、下痢、両膝の痛み、呼吸の苦しき

9月19日～ 胸の苦しき、だるさ、右膝の痛み

10月～ 全身の痛み、だるさ、疲れやすき、過眠、脱力、生理痛の悪化

11月～ 全身の痛み、膝のふるえ、だるさ、過眠、脱力

（2014年）

1月～ 皮膚炎、だるさ、過眠、全身の痛み、脱毛、発赤、呂律が回らない、動悸、不随意運動（左手指）、飲み込みにくき

### 5 現在の生活状況

現在は全身の疼痛、疲れやすき、記憶障害・認知障害、生理不順、動悸・ふるえ等の症状に悩まされている。学校へは週1回、1時間だけ相談室に登校している。杖・車いすを使って歩行・移動している。

### 6 受診医療機関

5医療機関（診療科目：耳鼻科、小児科、麻酔科、整形外科）

### 7 救済制度の申請

・予防接種救済申請中

・身体障害者申請…認定留保（症状固定に至っていないとの理由）

## T-35番 母 (茨城県牛久市)

(平成26年8月現在)

### 第1

#### 1 娘について

娘は、平成13年生まれで、現在中学2年生です。

花粉症はありますが、薬や食べ物に関するアレルギーはありません。

小学4年生の時は皆勤でしたし、5年生・6年生の時も、年間2日休んだ程度で、基本的には元気に過ごしていました。中学進学後も、HPVワクチンの副作用が出るまでは1日も休んだことがありませんでした。

運動神経が良くて、スポーツや運動、身体を動かすことが大好きです。性格ですが、誰のことも悪く言わないし、いつも笑っている、そんな明るい性格です。誰かからいじめられることもないし、目立っても決して妬まれることはない、そういう子です。

#### 2 HPVワクチン接種時のことについて

##### (1) 1回目の接種—平成25年5月28日

私は、娘に、定期接種になっているワクチンは全て受けさせていたので、HPVワクチンについても、娘が小学校を卒業する直前ころに定期接種化されたという通知が来たので、何の疑問を抱くこともなく、接種の予定を組みました。

1回目の接種は、平成25年5月28日でした。牛久市内で実施する医療機関のリストにあった、A耳鼻咽喉科で接種しましたが、医師から副反応についての説明はありませんでした。

接種後は、左右の太ももに、肉離れのような痛みを訴えていました。しかし、当時、娘はバスケットボール部に入って部活を始めたばかりだったので「部活の影響で軽い肉離れでもしているのかな」と、私も娘も思っていました。

結局、その痛みは、徐々に軽快し、7月初めころにはなくなったようで、私も娘も、「筋肉痛だったのだろう」という程度に思っていました。

##### (2) 2回目の接種—平成25年7月30日

###### ア 接種を決めるまで

2回目の接種は、平成25年7月30日でした。同じA耳鼻咽喉科で接種しました。

私は、この時、医師に「6月に『積極的勧奨を中止』という報道がありました。今回はどうしたら良いでしょうか。」と尋ねました。

すると、医師は「サーバリックスは副反応をいろいろ聞くけど、ガーダシルは聞かない。」「牛久市で重篤な人が出たと聞いたことはない。」などと、接種を勧める方向の話をしました。

医師から「1回目の接種では大丈夫だったんですね。」と確認があり、私は、1回目接種後の太ももの痛みは、筋肉痛と思っていたので、「大丈夫でした」と答えました。また、接種勧奨の通知文には「3回接種することで予防効果が得られる」という趣旨のことが書いてあったので、私としても「1回目の接種で問題はなかったのだから2回目の接種も大丈夫だろう」と思い、接種を決めました。

###### イ 接種後の症状

娘によると、2回目の接種後は、接種部位がとても痛かったようです。1回目の接

種は、普通の注射より少し痛かった程度だったようですが、2回目の接種は1回目の接種と異なり、接種後、肩が上がらなくなっていました。

娘はこの痛みについて「まるで骨にヒビが入っているみたい」と言っていました。私はこれも1回目の筋肉痛と同様「一時的なものかな。」と思いましたが、医師には特に何も言いませんでした。

### 3 症状の経過

#### (1) C総合医療センターへの入院（平成25年8月2日）から退院（同月5日）

2回目の接種から2日後の平成25年8月1日、娘が、昼食時に食事の飲み込みにくさを訴えることがあり、食事が摂れなくなったことがありました。ラーメン1杯を食べるのに1時間以上かかっていたのです。

娘は「病院に行くと、部活を休まなくちゃならないし、友達とも遊べなくなる」と、病院に行こうとしませんでした。しかし、娘から「(娘の部屋がある)2階に這って上がったよ」と聞き、さすがに「これはおかしい」と思い、保健センターに相談したところ「まずは接種をしたA耳鼻咽喉科を受診してください」と言われたので、翌日（平成25年8月2日）、A耳鼻咽喉科を受診しました。

受診当日の娘は、バスのステップすら1人で上がれず、手摺も掴めないような状態でした。バスを降りる時も、変な降り方をしたので、私は「これはおかしい」「部活の疲れや風邪などではないのでは」と思っていました。

A耳鼻咽喉科で診察を受けましたが、原因がわからなかったようで、B総合病院の小児科への紹介状を書いてもらい、そのまま同病院を受診しました。そこでは、手の検査・歩行検査・片足立ち検査を実施しましたが、まっすぐ歩けず、片足を上げてすぐ足をついてしまうという状態でした。また、同病院には小児神経科の先生が居なかったので、C総合医療センターあての紹介状を書いてもらい、その日のうちに同センターを受診しました。

そこでは、医師から「筋力の低下がみられる」と言われ、ギランバレー症候群を疑われて、経過観察目的で緊急入院することとなりました。歩行のふらつきも見られ、階段を上することも難しくなっていました。娘によると、足は痛くはないそうですが、千鳥足になったり、いきなり膝がかくんと力なく折れ曲がるようなこともあったりしたようです。

入院中、筋力検査・MRI検査・髄液検査などの検査を行ないましたが、異常はみられませんでした。入院中に、いくらか筋力が戻ってきて、食事も飲み込めるようになってきたとのことで、8月5日には退院することができました。退院時、痛みの症状は出ていませんでした。医師からは、「子宮頸がんワクチンによる一時的な筋力低下であったのではないか」「経過からすると、HPVワクチンによるものと思えない」と言われました。

この後、特段の治療は行わず、経過観察となりました。

#### (2) 退院後のこと

退院後は筋力も8割方戻り、お盆休み明けの平成25年8月21日から部活動に復帰しました。ところが、娘は、準備運動はしたのに、練習を開始してすぐに右足が肉離れを起こしてしまいました。マッチアップの相手に抜かれそうなところで、手を伸ばしたら、右足が伸び、そのまま倒れこんでしまったとのことでした。娘は、D整形外科を

受診し、肉離れと診断され、その後部活動には参加できなくなりました。

(3) 2学期が始まってからのこと

平成25年8月30日、2学期が始まると、娘は頻繁に「疲れた。」と言うようになりました。娘はもともと体力には自信があり、動いてないと気が済まないような性格だったにも関わらず、そのような訴えをしていたことに、ちょっと違和感を覚えました。

そしてその後次々と体の変調が現れ、2学期は、ほとんど登校できていません。

ア 娘は、9月5日に腹痛を起こし、学校を休みました。C総合医療センターで子宮頸がんワクチンとの関連を指摘されたこともあり、私は医師に子宮頸がんワクチンのことを伝えましたが、医師は「体力が落ちて、胃腸炎になったのではないか。」と言い、娘が楽しみにしていた9月7日の体育祭を見学するよう指示されました。娘は、「見学なら行きたくない。」と言って体育祭を欠席し、そのあともしばらく重い生理痛のような腹痛が続き、学校に行けませんでした。

9月12日には登校しましたが、部活動（朝連）に参加したところ、腹痛と下痢に襲われました。学校を早退してC総合医療センターを受診すると、医師からは「体力低下と、ワクチンとの関連は否定できない」との話がありました。

この日以降、娘の状態は悪いまま推移していきます。

9月17日からは、膝の痛みを訴えるようになりました。

9月18日には、娘がテレビ見ていると突然、胸を抑え、唇を真っ青にしてうずくまることがありました。3分くらいで胸の激痛は治まりましたが、娘は「心臓を、針でツツツと刺されているような感じ」と言っていました。痛みが治まっても、呼吸をすると苦しそうな様子でした。これ以降、たびたび発作的な胸の苦しさが現れるようになりました。

C総合医療センターで血液検査やレントゲン検査をし、また24時間監視の心電図検査も受けましたが、いずれも異常は発見されませんでした。

イ 10月になると、胸の痛みは減ってきたものの、膝の痛みがどんどんひどくなっていき、「膝が壊れる」と右膝の激しい痛みを訴えるようになりました。さらに痛みは全身に及び、発作的に、上半身、膝、足首等の全身に激痛が生じるようになりました。おおむね10分くらいで収まっていたのですが、たまに、30分くらい長く激痛が続くこともありました。発作的な激痛が来ない時も、痛みが完全になくなるわけではないようでした。

また、だるさや疲れがとれにくくなっていたようで、学校で授業中に居眠りすることが多くなりました。

さらにこのころから、脱力の症状が出てくるようになりました。膝の力が入らず、歩行がとても不安定になっていました。1歩1歩確かめながら歩くのがやっとで、立ち上がる時にも、何か支えがないとふらついてしまいました。

そして、10月18日には、利き手の右手でペンを持ち字を書くことが難しくなり、食事の時にも、箸からゴハンが落ちるようになってしまいました。そのため、左手でペンや箸を使う練習を始めました。

ウ その後も、お腹を押さえ、脂汗をかいて「痛い」と苦しむようなひどい生理痛、皮膚炎のような顔の発赤、飲み込みにくいという訴え、何度も同じことを聞いたり、昼間に話していた内容を夕方には忘れていたといった物忘れ、激しい動悸、左手の不随意運動など、様々な症状に襲われました。



#### 4 痛み研究班指定病院（D病院）の受診

この間、娘はC総合医療センターに通院していましたが、改善しないことから、平成25年10月24日に、厚労省が設置したHPVワクチンの痛み研究班の指定病院であるD病院を受診させました。医師からは「原因不明の関節痛です。」「一つの病気として治療していきましょう。」と言われ、整形外科での検査を勧められました。

整形外科の医師からは、12月3日に、「大変申しあげにくいですが、子宮頸がんワクチン副反応の可能性が高いです。」と言われました。その後診断書も発行され、そこには病名として「HPVワクチン接種後に全身の脱力感・関節痛」との記載があります。

ところが、平成26年1月20日に受診したD病院麻酔科の医師からは「医学的根拠の無い痛みである。」「環境を変えるために学校へ行きなさい。」「変な歩き方をしてはいけない。」「杖は使ってはいけない。」「わかった、君、友達にいじめられているよね。」などと、心因性の痛みと決めつけているような対応をされました。

さらに、7月の受診の際には、私が最近の娘の症状を医師に伝えたところ、「お母さんが心配するからいけない。」「早く治れというからいけない。」「1つ1つ症状を記録するな。」「血圧も測るな。」「何かあっても、ほっといても死なないからむやみに病院に連れて行くな」「この子の病名はヒステリーだ。」「僕は、個人的に、子宮頸がんワクチンの副反応はないと思っている」などと言われました。娘に対しても「努力が足りない。」「もっとやっている人はやっている。」と、冷たい対応でした。私は、平成25年12月に「HPVワクチン接種後に全身の脱力感・関節痛」との病名で診断書を作成したのは間違いなのか、と聞きましたが、医師は「ウソだと思わないが、自分ならヒステリーと書く」という回答でした。私は、「子宮頸がんワクチン接種後に、どうして同じような症状が出るのか。」「転換性障害が出ることの医学的根拠を教えてほしい」と言うと、医師は「わかりません」との回答でした。

このように、D病院の医師には心因性と決めつける対応をされていますが、C総合医療センターでカウンセリングを受けた臨床心理士の方からは、「心因性は考えにくい。」「痛みが心因性のものという場合、学校に行かなくてはならない状況になると腹痛が出る、というパターンが多い」「悲劇のヒロインタイプの子なら別だが、そういう性格の子ではない。身体を動かすことが好きなのに、痛みを訴えれば好きなこと（運動）を奪われるのだから、痛みを訴えても本人の得にならず、逆にストレスが増えるだけである。心因性と結論づけるのはあまりに乱暴である。」とされています。

#### 5 現在の症状について

##### (1) 痛み

以前のように、激痛の発作に襲われ、のたうちまわるようなことはなくなりました。

ただし、長時間歩くと特に膝が痛むようで、痛みがなくなることはないようです。股関節については「ハンマーで殴られたような痛み」「骨を引きぬかれる感じ」「骨をつぶされている感じ」という表現をしますし、最近では「引きちぎれる」「足がもぎとられる」という表現をして、痛みを訴えることがありました。

また、両肩にも痛みがあり、真上に腕を上げることはできません。

起床した瞬間から、肩・腰・背中・股関節、両膝が痛むことが多いようです。

腰が痛い時は「腰の骨がないような気がするから、腰の骨があるか触ってほしい」と

私に聞くようなこともありました。また、殺されるような悪夢を見るときも言っています。

(2) 疲れやすさ

起床時は、体がだるいことが多いようです。

平成26年1月以降、週1回（火曜日）1時間だけ、学校に登校するようにしています。

ただし、教室のある3階まで階段を上がることはできないので、1階の相談室に登校し、友だちと話すだけであり、授業には出ていません。この登校の往復で約3000歩、歩くこととなりますが、帰宅すると3時間は、「痛い、痛い」と訴えて、寝たきり状態です。

(3) 記憶障害、認知障害

最近、物忘れが激しくなるとともに、人が話しかけても無視することが増えました。

娘によると、人が喋っていても、何を言われているのか分からない時がたまにあるとのことでした。私の声には、現在は100%反応していますが、夫（単身赴任しており、週1回自宅に帰ります。）の声などは、反応が悪い時があります。

また、娘によると、話をしている時に、まさに今話している内容がわからなくなったり、内容について考える時間が長くなったとのこと。言葉が出て来なくなったり、人の名前が出て来なくなったりも、特に平成26年4月以降はよくあるようです。

(4) 生理不順

平成26年5月以降現在まで、月に2回～3回の頻度で、生理になります。基礎体温を一緒につけていますが、基礎体温表を見ても、上下の変動が激しく、いつ生理が来るのか見極められません。

(5) 動悸、ふるえ

動悸は今でも時々あります。不随意運動、というほどの激しい動きは今ではあまり見ませんが、ふるえは今でも出ます。

6 学校について

現在娘は中学2年生ですが、相応の勉強は全くしていません。

記憶力もあいまいですし、今は小学校3年生レベルの問題しか解けなくなっていました。

自分の身長を30cm物差しで測るが、何回物差しで測ったかを忘れてしまうような状態で、数字を覚えることが難しいです。かけ算や二桁の足し算もできなくなっています。小学校の時は、成績がすごく良かったというわけではありませんが、80点レベルの普通の成績はとってきていました。

勉強ができないことを娘に指摘することは、娘のストレスになるので、英語の単語練習・国語の漢字練習など淡々と作業できる勉強や、社会の問題集を、教科書を見ながらやらせるといった程度の勉強をさせているだけです。

進学については、通信制の高校に行くことを検討しています。このまま欠席が続くと、義務教育なので、3年生には自動的に上がりますが、私立高校は受験資格がなくなるそうです。県立高校の場合、医師の意見書で、休んでいた点についての明確な理由があれば進学できるようですが、そもそも中学校卒業程度の学力を身につけることはとても難しく、本人の負担にしかならないと思っています。

娘が考えている通信制高校は、週3回登校が原則のようで、あと1年半の間で週に3日

登校できる体力をつけられれば、と思っています。娘は、友達と触れあう機会が多いところ、すなわち登校日が多いところに進学したいと思っていたようです。家から自転車で15分程度のところにあります。

娘にとっては、部活動のバスケがしたい、体育祭も出たい。宿泊学習も出たい、一番楽しい時期に、これらを全て諦めさせています。娘の友達は、娘に気遣って、いろいろ助けてくれるのですが、娘は不自由になった自分を受け入れられていないようです。娘は「治るのに、どうして不自由な体を受け入れなければならないのか。」と、どこかで治ることを期待しているのだと思います。このような娘に、親は何をしてあげたらよいのでしょうか。

また、3年間の義務教育をほとんど受けることなく、通信制の高校に進学するとなれば、集団生活を学ぶことなく大人になってしまいます。仮に、今の症状が軽快したとしても、自宅で療養に充てざるを得なかったこの期間を、どう取り返せるのか、私はとても不安です。

## 7 救済申請、障害者申請

平成26年4月、予防接種救済申請をしましたが、いまだに返答はありません。7月25日、厚労省に行ったときに担当課に聞くと「県には返事した」と言われましたが、窓口の県の担当者に聞くと「国からは何も回答は来ていません」と言われてしまいました。

平成26年6月、「四肢筋力低下による起立・歩行障害」を根拠として、身体障害者申請もしました。しかし、7月29日、認定留保という結果が返ってきてしまいました。理由は、症状固定に至っていないからということでしたが、現状杖を使用しているのに、到底納得できませんでした。

娘は、膝の痛みのために平成25年11月から杖を使っており、医師も、市の担当者も、杖を使用して半年経過すれば身体障害者認定が下りるのでは、と言っていたので、認定留保という扱いになったことはとてもショックでした。

## 8 言いたいこと

私は、娘の身体を元通りにしてほしい、病気なら早く治してほしい、と、それだけを願っています。医療機関によっては、多彩な症状を訴えても、まるでこちらがウソをついているのではないか、というような扱いをされることがあり、とても悔しく思います。ワクチンの被害であることを認めてほしい、心因性や詐病の扱いをしないでほしいです。

私は、娘の身体を治してほしいのです。治療体制だけでもちゃんとしてほしいと思います。

## N-7番 要約

(平成26年10月現在)

### 1 被害者

匿名、住所地非公表。現在19歳

### 2 接種前

健康。中学校通学。欠席はほとんどなく、生徒会や部活動(卓球部)にも積極的に参加。花粉症はあったが市販薬等の服用で日常生活に影響なし。薬剤アレルギーなし。

### 3 接種

サーバリックス(計2回): 2011年3月25日(左腕)、同年4月25日(右腕)

### 4 経過概要

2011年3月25日 1回目接種。翌日から激しい頭痛と吐き気。突然頭痛が始まり1時間くらい続くという発作が続く。学校初日に倒れて両親が学校へ迎えに行く。以後、高校欠席。複数の医療機関で頭痛薬の処方を受けるが効果なし。

4月20日 頭痛が消え、翌21日から高校へ通学する。

4月25日 2回目接種。接種1時間後から激しい頭痛、吐き気、目がチカチカする等の症状。目を開けられない、立てない、歩けない、食事等もできない。

4月26日 接種した医療機関を受診。輸液と頭痛薬は効果なし。血液検査の結果、ワクチンの主成分に対するアレルギー反応なく、ワクチン接種との因果関係は不明と言われる。以後、接種医療機関をはじめ複数の医療機関を受診し頭痛薬処方等を処方されるが効果なし。診断名つかず。高校は欠席が続く。

5月 精神科クリニック受診するも、「心の病気ではない」と診断。週1回通院。

5月31日 同クリニックで「群発頭痛」の診断。処方される薬は効果なし。

8月26日 神経内科クリニック受診、「群発頭痛」の診断。様々な治療法を試し(保険適用外)、唯一純酸素吸入のみ頭痛軽減に効果あり。週1回通院。

10月頃 10段階で表現すると3~5程度の痛みが常にあり、頭痛発作が始まると痛みは10となり、その状態が1時間から2時間続く。頭痛発作は、毎日、午前2時、午前6時、午前10時の3回に定着。

10月4日 同神経内科クリニックで「慢性」群発頭痛(非定型性)と診断される。

2012年6月 頭部MRI検査を受けるが、異常なし。

11月11日~頭痛発作がない日が続く。

2013年1月18日 激しい頭痛発作再発(7-10程度の発作)。

### 5 症状

激しい頭痛(頭痛時に涙と鼻水)、吐き気、目のチカチカ、腰痛、疲労感、だるさ

### 6 受診医療機関

10か所以上

### 7 被害救済制度の申請

申請中

## N－7番

(平成26年10月現在)

### 1 はじめに

私は、平成23年3月と4月の2回にわたり子宮頸がんワクチンを接種しました。

ワクチンを接種した当時は、ちょうど、中学校を卒業して高校生活が始まる時期でしたが、ワクチン接種後の副反応のために、生活が一変してしまい、最終的に高校を退学するなどして現在に至っています。

以下では、子宮頸がんワクチン接種に至る経緯、副反応被害の内容、通院・治療の内容、症状の推移と現在の状況についてお話しします。

### 2 子宮頸がんワクチン接種に至る経緯

#### (1) 子宮頸がんワクチン接種前の状況

私は、子宮頸がんワクチン接種以前は健康で、学校を休むことはほとんどなく、生徒会活動や部活動（卓球部所属）にも積極的に参加していました。また、マラソンもしていました。

花粉症はありましたが、市販の薬を飲む程度で過ごしており、学校を休むようなことはもちろんなく、日常生活への影響もほとんどありませんでした。

平成22年11月、高校受験を控えていたため、初めてインフルエンザの予防接種を受けたところ、その後に軽い頭痛がありました。それでも、市販薬か、花粉症で通っていた近医で軽い頭痛薬を処方してもらったかのいずれかで対応して、日常生活への影響はなく、学校を休むこともありませんでした。

#### (2) 子宮頸がんワクチンを接種することとなった経緯

ア 私が中学校を卒業する少し前の時期（平成22年終わりころから平成23年初めころかと思います。）に、学校で、生徒全員に対して、子宮頸がんワクチンの接種を勧める書類が配布されました。また同時に、学校の先生からも、高校に進学する前に接種しましょう、との呼びかけがありました。

具体的な内容を正確に記憶しているわけではありませんが、当時の説明でよく覚えているのは、子宮頸がんワクチンを接種すれば子宮頸がんを予防できること、ワクチン接種は本来有料で3回必要だが、高校進学前に1回目を接種しておけば、その後のワクチン接種が高校進学後になっても、1回目を含めてすべて無料になるということです。

学校でワクチン接種を勧める書類が配布されたころ、テレビでは、子宮頸がん検診を勧めるCMが流れていました。そのためか、子宮頸がんは怖いという漠然とした意識があり、ワクチンで子宮頸がんを予防できるなら、ぜひ無料の期間に接種しておこうと思いました。

学校の友人もみな、接種するのが当然という雰囲気でした。

イ 平成23年2月の高校受験を控えて軽い頭痛があり、体調を整えるために5日ほど学校を休みましたが、生活にも受験勉強にも特に支障はありませんでした。

高校受験も問題なく受け、平成23年3月、無事に地元の高校に合格しました。

(3) 第1回目の子宮頸がんワクチン接種時の状況

高校入学前に1回目の子宮頸がんワクチン接種を受けなければならないと思っていましたので、合格後、急かされるように、自宅近くの「Aクリニック」でワクチン接種の予約をしました。

平成23年3月25日、Aクリニックで、1回目の子宮頸がんワクチン「サーバリックス」の接種を受けました（第1回ワクチン接種）。接種部位は左上腕で、接種方法は筋肉注射でした。

接種前に、付き添ってくれた母が、Aクリニックで渡された「子宮頸がんワクチン予防接種予診票」に記入しましたが、その際も、接種の前後にも、医師や看護師などから、ワクチンの効果や副反応についての説明はありませんでした。

接種した直後は、明らかな体の異変はありませんでした。何となく元気がでない状態でしたが、それは、高校受験が終わった直後なので元気がないのかなと思っていました。

3 第1回ワクチン接種後の副反応について（平成23年3月26日から、強い頭痛と吐き気）

子宮頸がんワクチン接種の翌日（平成23年3月26日）、突然、強い頭痛に襲われました。吐き気も強く、食事をしたり入浴したりすることもできず、ずっとベッドに横になっていました。

それまでも軽い片頭痛は経験したことがありましたが、痛みの種類も激しさもそれまで経験した頭痛とは全く異なっていました。

このような痛みが、一日のなかで、特に前兆もなく突然、しかも何度も襲ってきて、しばらくの間（約1時間）続くということが、毎日起こるようになりました。

それでも、当時は頭痛の原因に思い当たるところがなく、高校に入学したことによる不安やストレスのために頭痛が起きているのかもしれないと思っていました。

4 第1回ワクチン接種後の通院状況と2回目の子宮頸がんワクチンを接種した経緯

(1) 第1回ワクチン接種後の通院状況

平成23年3月28日（第1回ワクチン接種から3日後）、自宅近くのB医院で頭痛薬を処方してもらい服用しましたが、まったく効く気配がなく、激しい頭痛は同様に続きました。

平成23年4月、高校の入学式は何とか出ることができましたが、初日にあたる4月11日、学校で激しい頭痛に襲われました。吐き気もひどく、担任の先生に支えてもらい、親に学校まで迎えに来てもらって早退しました。

4月11日は学校を早退してすぐ自宅近くのC医院を受診しましたが、はっきりとした診断はつきませんでした。頭痛薬や胃薬をもらって服用しましたが、頭痛が治まることはありませんでした。

4月15日にもC医院で頭痛薬等を処方され、4月18日にはB医院でも頭痛薬等を処方されていずれも服用しましたが、頭痛の程度も頻度や症状も軽くなることはありませんでした。この時期は、頭痛の原因に関して、医師からは何の話もありませんでした。

強い頭痛が毎日、頻繁に襲ってくるため、高校は、4月11日に早退して以降、欠席することが続きました。

(2) 2回目の子宮頸がんワクチンを接種した経緯

平成23年4月20日ころ、それまで毎日続いていた強い頭痛が嘘のように治まりました。そのため4月21日から、私は高校へ登校することができました。

頭痛が治まったため、私は治まっているうちに、子宮頸がんワクチンの接種を済ませてしまおうと考え、Aクリニックに子宮頸がんワクチン接種の予約を入れました。このときは、頭痛の原因が子宮頸がんワクチンかもしれないなどとは全く思っておりませんでしたので、むしろ頭痛が治まっているうちに接種しておかなければならないと考えたのです。

(3) 2回目の子宮頸がんワクチン接種時の状況

平成23年4月25日夕方、Aクリニックで、2回目の子宮頸がんワクチン「サーバリックス」の接種を受けました（第2回ワクチン接種）。このときの接種部位は右上腕で、接種方法は筋肉注射でした。

2回目のワクチン接種前に、付き添ってくれた母が「子宮頸がんワクチン予防接種予診票」に記入しました。この予診票の「④最近1ヶ月以内に病気にかかりましたか。」という質問欄に、「頭痛（花粉症による）」と記載してあります。「花粉症による」と記載したのは、第1回ワクチン接種後の頭痛の原因について、医療機関では明確な診断がなされず、私も母も花粉症くらいしか思い当たらなかったためです。

第2回ワクチン接種のときも、第1回ワクチン接種のときと同様に、医師や看護師などから、ワクチンの効果や副反応についての説明はありませんでした。

5 第2回ワクチン接種後の副反応について（予防接種の約1時間後から、激しい頭痛と吐き気、目がチカチカする等の症状）

2回目のワクチン接種を受けたあと、母が運転する車で自宅へ帰りましたが、接種から約1時間ほど経ったころ、自宅で、激しい頭痛に襲われました。第1回ワクチン接種後の頭痛よりも強く、それまで経験したことのない激しさで、例えるとすれば、目の奥を刃物でえぐられるような痛みでした。激しい痛みのために涙や鼻水が止まらず、強い吐き気もありました。歩くことも立っていることもできず、ベッドに横になって必死で耐えるしかありませんでした。食事をしたり入浴することもできませんでした。

このような頭痛は、夜中もずっと続き、眠ることもできませんでした。少しうとうとしても、激しい頭痛が始まると痛みのために起きてしまうような状態でした。

母は、第2回ワクチン接種の直後から頭痛が始まったため、直感的に、ワクチンが原因ではないかと考えたそうです。

6 第2回ワクチン接種後の通院状況と症状の推移

(1) 第2回ワクチン接種の翌日（平成23年4月26日）の朝も激しい頭痛は続いていました。また、目を開けるとチカチカしてしまい、酔ったような状態で焦点があわず、気持ちが悪くて目を開けていることができませんでした。

母が私を抱きかかえて、Aクリニックを受診し、第2回ワクチン接種後から激しい頭痛と吐き気、開眼時に目がチカチカして開眼してられないなどの症状が出ていることを訴えました。

Aクリニックの医師は、薬剤アレルギー等が原因となっている可能性を考えて血液検査のための採血をしました。また、輸液による投薬をしてくれましたが、頭痛等の症状は一向に治まりませんでした。

母は、地元の保健センターにも連絡し、保健婦さんには病院にも付き添ってもらいましたが、ワクチンの副作用かどうか分からないということで、その後の連絡は途絶えてしまいました。

平成23年4月27日、Aクリニックの医師から、血液検査の結果、子宮頸がんワクチンの主成分のアレルギー反応がないため、ワクチンの副作用かどうか分からないと言われました（なお、このとき桃やキウイなどの食べ物には多少のアレルギーがあると言われましたが、日常生活に影響が出たことはありません。）。その日も輸液投薬を受けて帰りましたが、激しい頭痛や吐き気、目のチカチカ等の症状は、ほとんど軽減されませんでした。

Aクリニックには、平成23年5月6日まで毎日通い、輸液投薬を受けていましたが、頭痛等の症状は変わりませんでした。

痛みの程度には波がありました。痛みが強いつきは、こんなに痛くて、なぜ死なないのだろうと不思議に思うほどでした。痛みを耐えるために、家の壁などに拳を強く打ち付けたり、腕などの身体の一部に爪を立て強く握りしめたりしてしまい、身体に傷がつくようなことも、しばしばありました。起きていることはほとんどできず、食事も、一日一食食べられるかどうかという状態でした。

(2) 平成23年5月9日、D鍼灸接骨院で鍼灸治療を受けました。その後も、平成23年6月まで、土日を除いてほとんど毎日通いましたが、頭痛等の症状は軽減されませんでした。

(3) 平成23年5月17日、精神科治療を専門とするEクリニックを受診しました。その後も、毎週1回通院し、頭痛薬（トリプタン）の処方を受けました。

脳波検査も受けましたが、異常は認められませんでした。また、心理テストも受けましたが、その結果、心の病気ではないと診断されました。

5月31日、「群発頭痛」との診断名を告げられ、頭痛薬（トリプタン、マクサルト、ミグシス）の処方を受けました。しかし頭痛薬を服用しても、頭痛等の症状が治まることはありませんでした。

(4) 平成23年6月ころ、F病院産婦人科外来に一度だけ行きましたが、「そのうち治るでしょう。」「気にしすぎです。」などと言われて、取り合ってもらえませんでした。

(5) 平成23年7月終わりのころまで、Eクリニックへ、毎週1回通院を続け、薬の処方を受けていました。

7月29日ころから、原因は分かりませんが、頭痛の程度が、ひどいときの3割から5割程度に落ち着くようになりました。

(6) Eクリニックで「群発頭痛」の診断を受けてから、母が群発頭痛について調べるなかで、G神経内科クリニックのG医師が、頭痛専門医として群発頭痛の治療についての本を書いていることを知りました。

平成23年8月26日、G神経内科クリニックを初めて受診し、「群発頭痛」の診断を受けました。

ただし頭痛の原因については、「きっかけは子宮頸がんワクチン予防接種かもしれないが、はっきりとはわからない。」と言われました。



G神経内科クリニックからは、頭痛予防薬（ワソラン）と頭痛薬（トリプタン）の処方を受けました。

- (7) 平成23年8月29日から約1週間は、頭痛がほとんどない日が続いたため、登校することができましたが、9月5日、学校で激しい頭痛に襲われて倒れてしまい、両親に迎えに来てもらって学校を早退しました。このときから、頭痛の激しさは最もひどかったときと同じ程度まで戻ってしまいました。

平成23年9月5日から、毎週1回、G神経内科クリニックへ通院を始めました。

G医師から紹介される治療法は、保険適用外のものが多かったのですが、試せるものは試してみようと、すべての治療法を受けてみました。1回4万円もする治療法もありましたが、どれも全く効果がありませんでした。

唯一、対症療法として勧められた純酸素吸入だけが、頭痛発作時かその少し前に使うと、頭痛の程度が軽く時間も短く治まることが分かりました。群発頭痛に対する純酸素吸入の処方保険適用外でしたが、以後、純酸素ボンベが手放せなくなり、自宅まで届けてもらうようになりました。

- (8) 平成23年10月ころには、痛みを10段階評価で表すとすれば、3～5程度の痛みが常にある状態が続きました。そして、頭痛発作が始まると、痛みの程度は最大の10まで達し、その状態が1時間から2時間も続くような状況でした。このころになると、頭痛発作は、毎日、午前2時、午前6時、午前10時の3回起きることが定着していました。

平成23年10月4日には、G医師から、群発頭痛のなかでも「慢性」の群発頭痛と診断されました。同医師の話では、群発頭痛は、一般的に症状があるのは年に数ヶ月間であり、1年間続く症例は少なく、しかも患者はほとんどが男性ということでした。そのため、私の症状は、G医師からみても非定型性のものなのだそうです。

- (9) G神経内科クリニックに通院して、さまざまな治療法を試しながら、他の病院や鍼灸院などにも相談を重ねました。漢方薬、歯のかみ合わせ治療、鍼灸治療など、試せるものは全て試しました。

しかしながら、G神経内科クリニックで勧められる薬も、その他の病院等の治療法も、全く効果はありませんでした。

G神経内科クリニックの紹介で頭部MRI検査も受けましたが、異常はないと言われました。ある病院では、G医師の診察を受けていると話したところ、「G先生の治療以上にできることはない。」という趣旨のことを言われてしまい、まったく取り合ってもらえませんでした。

頭痛の程度が一時的に軽減して3～5割程度になったり、頭痛発作の回数が2回程度になることもありましたが、時間が経つと再び状態が悪化するということを繰り返しました。

- (10) 平成24年2月26日、遠方のHクリニック院長のH医師が当地区を訪れていたため、相談したところ、「頭痛の原因は子宮頸がんワクチンに入っているアジュバントの可能性が高い。なぜ接種したのか。」と言われました。

## 7 副反応のために高校を2度にわたり留年

平成23年3月25日に第1回ワクチンを接種してから、私は、せっかく入学した高校を、頭痛等の症状のために欠席する日が続きました。

ごくたまに、頭痛が治まったと思って登校しても、学校で激しい頭痛や吐き気に襲われて倒れてしまい、親に車で迎えに来てもらうということを繰り返しました。処方されている頭痛薬を常に携帯していましたが、頭痛が始まると効かないため、何の役にも立ちませんでした。

高校の先生は、一日のうちの一部の授業でも出席すれば出席したことになると励ましてくれ、学校で配布したプリントを自宅まで届けてくれるなどの配慮もしてくれました。私は励まされて、一日3回の頭痛発作を避けて登校を試みたり、試験の時間をずらしてもらって受けるなどの努力を重ねましたが、頭痛や、頭痛による睡眠不足の影響もあって体調を崩し、出席できない日が続きました。

結局、出席日数不足のために、平成23年、平成24年の2度にわたって留年しました。

## 8 高校認定試験の受験勉強と受験

平成24年9月、二度目の留年が確実になりました。このころから、私は、何とか高校認定試験を受けて大学に入学したいと強く望むようになりました。

この時期の病状としては、まだ常に頭痛がありましたし、頭痛発作の激しさも変わりませんでした。頭痛発作の時間帯は、午前2時、午前6時、午前10時の一日3回にほぼ定着してきており、日によっては午前10時の頭痛発作がないこともありました。また、頭痛発作が始まる前兆を感じるようになっていたため、発作が始まる少し前に酸素吸入を始めると、頭痛の程度が多少和らぎ、発作が続く時間も短く（5～10分程度）治まるようになっていました。

そのため、午後体調のよい日に、週2回だけ塾に通わせてもらい、高校認定試験の勉強に打ち込みました。

平成24年11月10日から翌11日にかけて、高校認定試験を受けました。このころは、頭痛発作が午前2時と午前6時の二回に減り、その程度も、最もひどいときを10として10段階評価で表すと3～5程度になっていました。そのため、奇跡的に二日間とも試験を受けることができました。頭痛がなかったことを、心から神様に感謝しました。

このまま頭痛がなくなれば、翌年は同級生と一緒に大学受験ができるのではないかと希望を持ちました。

## 9 症状の改善と再発、高校へ休学届を提出したこと

平成24年11月11日に高校認定試験が終了したころからは、頭痛発作がない期間が、2ヶ月ほど続きました。

平成24年12月27日には、友人と夜行バスで遊園地に行くこともできました。高校のスキー研修も修学旅行も行けなかった私にとっては、本当に嬉しいことでした。

しかしながら、平成25年1月18日、激しい頭痛発作が再発しました。頭痛の程度は最もひどいときとほぼ同様で、10段階評価で表すと7～10です。頭痛発作は一日3回起きました。

子宮頸がんワクチンが抜けて頭痛が治ったと信じたい気持ちが強かったためか、頭痛が再発したときには、言葉にならないほど大きなショックを受けました。

平成25年3月末、私は、高校に休学届を提出しました。

## 10 全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会とのつながり、現在の状況

- (1) 平成25年3月、私の母は、新聞で東京都日野市の池田利恵市議のコラムを読み、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会の存在を知って同会にメールを送り、このたびの被害報告につながりました。

連絡会を通じて医薬品医療機器総合機構のことを知り、平成25年9月24日付で、副作用救済給付の障害年金請求書を提出しました。こちらは、結果を待っているところです。

- (2) 現在は、頭痛発作が一日3回、ほぼ決まった時間に起きるようになり、発作が2回になる日もあります。発作が始まる時間と前兆を目安にして、発作が始まる少し前から純酸素の吸入をすることで、頭痛の程度を軽くしたり発作の継続時間を短く押さえることができています。

それでも、生活には大きな影響があります。

夜中に寝てしまうと、頭痛発作が起きる前に酸素吸入を始めることができず頭痛が激しくなるのが怖いため、夜中には眠ることができません。頭痛発作がない昼間に睡眠をとりますが、昼間に用事があるなどして眠れないときには、昼も夜も睡眠を取ることができません。そんな日が二日も続くと、昼間に倒れてしまいます。また、湯船につかると、頭痛発作の時間がずれたり前兆に気づかないことがあるため、湯船につかるのも控えるようになりました。頭痛のために常に疲労感があり、一日寝ていることもあります。寝ていることが多いため、腰痛もあります。

そして何より、純酸素吸入（保険適用外）を毎日1～3回行うため、治療費が非常に嵩みます。今も酸素ボンベをG神経内科クリニックから届けてもらうのですが、費用は月2～3万円にもなります。

通院は、平成24年10月18日から、I大学病院へ通っていますが、処方される薬はどれも効果がなく、ただ症状を伝えるために行っているという状態です。それでも月3000円～8000円程度の受診料と交通費がかかります。

進路に関しては、平成25年8月、幸い高校認定試験に合格することができましたが、高校は結局退学届を出しました。また、大学の進学先も、頭痛発作のため、もともとの夢だった機械工学系の学部への進学はかなわず、第二希望だった管理栄養士も、出席や実習が必要ということでしたので、断念せざるを得ませんでした。幸い、パソコン通信のみで卒業できる通信教育芸術学部のある大学がありましたので、平成26年4月に入学しました。

今は、大学生として、高校時代にできなかった勉強をすることができるのが嬉しく、課題などにも積極的に取り組んでいます。それでも、慎重に時間を調整して頭痛発作の時間帯を避けたり、高い費用をかけて頭痛発作をできるだけ抑えながら、ようやく生活をしているという状況です。

## 1.1 さいごに

私は、子宮頸がんワクチンの接種をしてから、生活も夢も人生も、本当に一変してしまいました。

今では、子宮頸がんワクチンの効果や副反応について、いろいろな報道がなされていますが、私が接種を勧められた当時は、そのようなことは全くなく、医師等からの説明もありませんでした。今の正直な気持ちとしては、接種しても定期健診へ行く必要があるのなら、接種する必要はなかったとすら思います。急かされるように接種するのではなく、き

ちんとした効果や副反応の説明を受けた上で、接種するかどうか選択したかったと、強く  
思います。

今はもう、治るという期待をしないようにしていますが、将来への不安は尽きません。

## N—14番 要約

(平成26年10月現在)

- 1 被害者  
平成8年生まれ。接種時中学2年生（14歳）、現在18歳、愛知県居住。
- 2 接種前  
バスケ部所属。学校の欠席はほとんどなし。
- 3 接種  
サーバックス3回（2010年12月21日、2011年1月28日、6月23日）
- 4 経過概要  
2010年12月 中学校（中2）からの連絡をきっかけに1回目の接種  
2011年 1月 2回目の接種（1回目の接種後、注射部位の痛みと左腕のしびれ有）  
6月 3回目の接種（中3）  
2012年夏冬 高1夏休みの部活中、後ろ向きにあるいていたところ、恥骨骨折。その後、冬休み前にも恥骨を骨折。直接のきっかけは不明。  
2013年 9月 左手足がしびれる（手首、足首より先の部分）。病院受診。  
12月 3日間検査入院。当初、多発性硬化症を疑われる。  
2014年 1月 上記病院に8日間検査入院。原因分からず。同院の心療内科を紹介される。（その後、他院の心療内科を2つ受診する。）  
3月 左足に力が入らず、自転車に乗れなくなる。送迎登校が始まる。  
4月 杖歩行も困難になり、校内に車で乗り入れるようになる。左腕、左足に感覚がなく、力が入らない。  
6月 就寝中酷い痙攣。近隣の病院に入院。検査の結果、てんかんの可能性は否定。毎日のように痙攣がある。痙攣があると記憶が途切れてしまう。数字やひらがなも理解できない。退院後は、自宅も覚えておらず、妹や同級生も記憶していなかった。  
8月 4日から30日まで、大学病院に入院。
- 5 これまでに発症した主な症状  
左手足のしびれ、左腕足の運動・感覚麻痺、頭痛、疲労感、だるさ、けいれん、手足・身体の震え、動悸、脈が速い、息が苦しい、脱力、視力・聴力低下（見えない・聞こえない）、歩行が不安定、記憶力や判断力の低下（記憶がない）、気力が出ない、睡眠障害、識字能力の低下、文章理解力低下
- 6 受診医療機関  
およそ10医療機関
- 7 現在の状況  
左腕左足の麻痺の継続。頭痛。朝、死んだように起きられない。
- 8 救済制度の申請 申請していない。

## N-14番 (愛知県)

(平成26年10月現在)

### 第1 はじめに

私は、平成22年12月から平成23年6月にかけて、3回にわたり子宮頸がんワクチンであるサーバリックス（以下、「ワクチン」といいます）の接種を受けました。

私がワクチンを接種するに至った経緯と、ワクチンによる副反応被害についてお話しします。

### 第2 ワクチン接種に至る経緯

#### 1 ワクチン接種までの状況

##### (1) 接種前の生活

私は、第1回目の接種をした当時、中学2年生でバスケットボール部に所属していました。

私にはそれまで持病はなく、小中学校ともに、たまに風邪をひいたときに休むくらいで、殆ど休むことなく通学していました。

##### (2) 接種に至る経緯

ワクチンの接種をしたきっかけは、学校から接種に関するお知らせを受け取ったことです。いつ頃そのお知らせを受け取ったかはっきりと覚えていません。ただ、多くの友達たちは私より前に接種していました。母が私の友達のお母さんから早く接種しないと無料の期間が終わってしまうと聞いて、慌てて病院に行き、接種しました。

#### 2 ワクチンの接種

1回目の接種は、平成22年12月21日、中学2年生の冬休み前にA内科小児科で接種をしました。注射直後は特に違和感はありませんでした。

ただ、翌平成23年1月28日に2回目の接種を受けたときには、注射した部分が痛いのだと、左手がしびれていたのだと、それをお医者さんに伝えたのを覚えています。それを伝えてもお医者さんからは特に何も言われませんでした。

そして、中学3年生になった平成23年6月に3回目の接種をしました。2回目と3回目の接種の後には特に変わったところはなく、左手のしびれもいつの間にか消えていました。

予防接種を受けた際、病院からはワクチンについて何も説明は受けませんでした。

### 第3 副反応及び入通院の経過

#### 1 平成24年夏冬

ワクチン接種と関係があるのか分かりませんが、高校1年生の夏休み中、バスケットボール部の部活動中に恥骨の左側を骨折しました。部活動中といっても、激しい動きをしていただけではなく、試合中、ただ後ろ向きに歩いているときでした。試合中、痛くて急に歩くことができなくなったのです。病院に行ったところ、手術することはできないということで、安静にして骨がくっつくのを待つことになりました。それから、部活動は全て見学するようになりました。

その後、冬休み前ころに痛みを感じ、病院を受診したところ、今度は恥骨の右側が骨折していました。そのときはいつ骨折したのかも分かりませんでした。

## 2 平成25年9月ころ～平成26年3月ころ

### (1) 初めの症状

最初、身体に違和感を感じたのは、平成25年9月頃です。そのときは、左手足の感覚がないような感じになりました。左手の手首から先と、左足の足首から先に力が入らなくなるようになりました。例えば左手で何か持というとしても、かくんと力が抜けてしまいました。

その後、階段を降りているときや普通に歩いているとき等にも、左膝がかくんと折れてしまい、動けなくなるようになりました。一度そうなると10分位じっとしていないと動くことができませんでした。その年の6月から部活動に復帰するようになっていたのですが、また、部活動を休まなければならなくなりました。

### (2) 通院の状況～B病院と心療内科の受診

B病院の神経内科を受診し、色々と検査をしました。先生からは入院して検査をする必要があると言われましたが、学校を休みたくなかったため、入院は断っていました。というのは、私は推薦で進学したいと思っていましたので、学校には無遅刻無欠席で通いたかったのです。ですが、その後も何度も左膝が抜けることがあり、このままではいつまでも部活動に復帰できないと思ったのと、アルバイトをしていたラーメン屋さんで1日に3回もラーメン鉢を落としてしまうなど今までには考えられないことが起こったため、入院して検査をすることにしました。

平成25年12月6日から8日と、平成26年1月13日から20日の2回に渡って入院しました。髄液を抜いて検査をしました。その検査の後は、酷い吐き気や頭痛が続き、本当に辛くて苦しかったです。そんな辛い思いをして検査を受けたのに、結局原因は分かりませんでした。病院の先生は初め難病を疑っていたようですが、検査の結果、そうではなかったとのことでした。

先生には心の問題だと思われたのか、心療内科を受診するように言われ、B病院の心療内科を受診しました。ですが、B病院の先生は一定の期間で変わってしまうので、同じ先生に診て貰おうと比較的近くのCメンタルクリニックに通うことにしました。その後、D大学病院の心療科に行くようになりました。そこでは待ち時間は長かったので、先生と話すことができるのは10分くらいでした。先生からは、わざわざ学校を抜けて受診してもこれくらいしかできないよと言われ、自分でも心の問題だとは感じていませんでしたので、3回くらい通って止めてしまいました。

## 3 平成26年3月から6月まで

### (1) 左腕、左脚の脱力

3月に入ると、左腕や左脚に力が入らないのが酷くなってきました。高校へは自転車で通っていたのですが、3月になると、左脚に力が入らず、ペダルを踏み込めず、自転車に乗れなくなってしまいました。それでも初めは何とか左脚を引きずるようにして歩くことができましたので、歩いて登校していました。ですが、左腕と左脚の脱力は徐々に酷くなり、母に車で送迎して貰うようになりました。4月ころは校門まで送ってもらい、校門から校舎まで歩いていました。5月ころまでは、左脚を引きずりながら、何とか校舎まで歩くことができていると思います。

ですが、6月に一気に症状が酷くなってしまいました。私に記憶はないのですが、ある日、夜寝ていたところ、全身が痙攣してしまいました。母によれば、魚が陸に上がっ

たときのように、全身をバタバタさせるような酷い痙攣だったそうです。痙攣をしたのち、過呼吸を起こして、意識を失ったとのことでした。その後、毎日毎晩のように痙攣が続きました。起きているときも、手足が勝手に動いてしまうことがありました。

#### (2) Eセンターへの入院

私が自転車に乗れなくなったころから、母は、母の友人からワクチンの影響ではないかと聞き、色々と病院を調べたりしていたようです。母は、私が痙攣するようになってから、Eセンターの受診予約をとっていました。ですが、ある日、私の痙攣が酷く、舌がねじれて動かなくなってしまい、ろれつも回らなくなってしまいました。そこで、急遽、6月10日から入院することになりました(18日退院)。そこでは髄液検査もし、スペクトでの検査もやりました。

髄液検査の後は、以前と同じように吐き気や頭痛が酷く、ずっと横になっていました。検査の結果、てんかんではないということは分かりました。先生からはワクチンの副反応の疑いとはいえるとしても、直接の原因は分からないとのことでした。また、頭痛に対して痛み止めを処方されましたが、全く効果がありませんでした。

Eセンターに入院中、私は数字が読めなくなってしまい、携帯電話の暗証番号を押すことができなくなってしまいました。ひらがなも読めなくなって自分でも驚きました。私は、この入院中から車いす生活になりました。また、自分では覚えておらず、後に母から聞いたことなのですが、Eセンターに入院したのは6月10日だったのに、私はその前日が5月20日だと思っていたようです。5月20日はバスケットボール部の大会でした。私は全く動けない状態だったのですが、顧問の先生やチームメイトが、ラスト30秒間だけ私をゴール下に立たせてくれたのです。私はふらふらしながら立っているのがやっとでしたが、30秒間だけでも試合に出ることができ、とても嬉しかったのを覚えています。私は、Eセンターに入院したときに、「昨日の試合は楽しかった。」と、5月20日の試合のことを口にしたそうです。

### 4 Eセンターの退院後から平成26年8月まで

#### (1) 退院後の症状

私は6月18日にEセンターを退院しました。私は、母と一緒に車で自宅に戻ったのですが、自宅も覚えていなかったらしく、帰宅しても「ここどこ？」と聞き、自分の家ではない、帰らせて欲しいと母に言ったそうです。また、妹のことも覚えていませんでした。そして、家に帰ろうと、無理に脚を引きずって玄関から外へ出ていったものの、マンションの階段が降りることができず、母になだめられて自宅に戻ったそうです。退院後、翌日から学校に行きましたが、クラス全員の名前と顔が分かるはずなのに、数人以外、誰なのか全く分かりませんでした。

その後も自分では分からないうちに家を出て、外で気がつくことがありました。痙攣があると記憶が飛んでしまい、次の痙攣で記憶が戻るといった具合です。ただ、痙攣から痙攣までの記憶はありません。

痙攣を起こしそうになると何となくふわふわした感じがしてきます。学校でそんな感じがしてきたときには直ぐに母に連絡をし、迎えに来て貰います。母に迎えに来て貰った直後、車の中で痙攣を起こしたこともあります。

Eセンターを退院後、数字やひらがなは読めるようになりましたが、漢字は読むことが苦手です。書くのも自分ではちゃんと書いているつもりでも、偏と旁がぐちゃぐちゃ



に並んでいたりします。簡単な文章を読んでも、意味を理解することはとても難しいです。

また、いつ頃かはっきりと覚えていませんが、あるときから左耳が聞こえにくくなり、数日後には左目も見えにくくなりました。左耳が聞こえていないのは、たまたま右耳を右腕に押しつけた状態で机に突っ伏していたとき、母が近くで私を呼ぶ声が全く聞こえていなかったことで判りました。その後、半日間、全く目も見えず、耳も聞こえなかったこともあります。そのときは何も見えず、何も聞こえず、本当に恐ろしかったです。

## (2) 入通院の状況

平成26年7月には、遠方のFクリニックを受診し、ビタミン点滴とビタミン剤の処方を受けました。母が、色々と調べて受診したものです。ビタミン点滴を受けた後、初めて頭痛が治まりました。でも、とても遠かったので、先生から自宅に近い病院を紹介され、その後、Gクリニックを受診し、ビタミン剤の処方を受けました。

その後、平成26年8月4日から30日まで、H大学病院の神経内科に入院しました。そこでは検査だけでなく、リハビリをしていました。また、入院中、主治医の先生から精神科も受診するように指示を受けて受診しましたが、精神科を初めて受診したときにいきなり先生から「車いす生活を楽しんでるんでしょ？」と言われ、とても傷つき、看護師さんに相談したうえ、精神科の受診は止めました。

## 第4 現在の状況

### 1 現在の症状や生活について

退院後も左腕左脚の麻痺は変わらず続いています。また、頭痛もずっと続いています。常にぎゅーっと締め付けられるような痛みがあります。また、記憶障害や識字障害も依然として続いています。夜気づくと自分が自宅を出て外に居たということもあります。最近では心臓が締め付けられるような痛みもありました。

記憶が続かず、学校の授業もついて行くことは難しいですが、友人や学校の先生が私の症状を理解してくれ、助けて貰っています。ただ、夜に脚がムズムズして眠れなかったり、目が覚めても身体が直ぐに動かなかったりして、朝起きることが非常に辛く、時間通りに登校することは余りできていません。

### 2 通院状況

治療については、H大学病院の先生から、退院後もリハビリを続けるように言われ、現在はI病院で週に1回リハビリを受けています。ビタミン剤の処方H大学病院の先生に止めるように言われたので、H大学病院を退院した後は止めています。

## 第5 家族への影響

母は、昼に倉庫作業の仕事を、夜にコンビニの仕事をしていたのですが、私の世話のために夜の仕事を辞めました。夜間、私が一人で知らない間に外出してしまったりするためです。

また、H大学病院に入院していたときには、母は車で何度も日帰りで病院に来てくれました。ガソリン代もかかっていると思いますし、母に相当な負担をかけていると思います。また、父や妹のことも覚えていなかったりと、家族みんなに迷惑や心配をかけたと思います。

## 第6 おわりに

私は、高校に入学したときから推薦による進学を目指していました。そのため、無遅刻無欠席で登校するつもりでした。部活動も小学校から続けていたバスケットボール部で頑張ろうと思っていました。ですが、私が思い描いていた学校生活は崩れ去ってしまいました。私は、以前から看護系の専門学校へ進学したいと思っていましたが、推薦を受けることはもちろん、受験することも断念せざるを得なくなりました。左腕左脚が麻痺した状態では、看護系の学校への進学は無理だろうと言われたからです。残念でたまりません。

とにかく私の身体や生活を元に戻して欲しいと思います。

## 〇ー1番 要約

(平成26年6月現在)

### 1 被害者

平成7年生。接種時高校1年生(16歳3ヶ月)。聴取時19才。

### 2 ワクチン接種前の健康状況等

健康(中3時、高1の1学期の欠席日数0日)。幼稚園の頃から10年以上ピアノ継続。

### 3 ワクチンの接種状況

サーバリックス(3回:H23.8.16、H23.10.15、H24.2.25)

### 4 経過概要

平成23年 8月16日 かかりつけ医のA医院にて1回目の接種

同月頃 これまでにない生理痛、1回あたりの出血量にばらつきが生じる。

10月15日 2回目の接種

10月23日 右足首の腫れ

10月26日 右膝→左膝→右肩→左肩と関節の痛みが次々と生じる

10月31日 右手の痛みでペンも握れず、両膝の痛みで歩行困難となる。

B医院受診。レントゲン等でも原因不明。痛み止めと湿布をもらう。

11月 8日 前夜に右手に違和感、右手の痛みで起床。手首、指、膝の腫れ。

関節リウマチを示唆され血液検査を行う。

11月9日 膝を曲げるとコリコリする。右顎が痛む。

11月12日 両膝、右顎、右手首、両肩に痛み。血液検査で関節リウマチと診断。

11月15日 右手の腫れは治まるが膝の痛みは酷く腫れも生じる。

11月17日 注射器で右膝の水を抜く(黄色く濁った水)。通学が困難。

11月28日 C総合病院検査入院、若年性関節リウマチと診断。

～12月6日 小児慢性特定疾患の申請

12月頃～ 月に一度通院。抗リウマチ薬による治療を行うが病状は改善せず。

平成24年 2月 食事とトイレ以外はほぼ寝たきり状態。

2月25日 3回目の接種

3月7日～ 生物学的製剤(アクテムラ)投与のため入院

4月以降 少しずつ通学可能

### 5 症状

第2回接種8日後から両足首、両膝、両手首、両肩、顎、指の痛み及び腫れ。

痛みから歩行困難、食事困難、ほぼ寝たきり状態となる。

### 6 現在の状況

月に一度の生物学的製剤(アクテムラ)の投与、検査、診断により症状が改善し、平成26年4月からは、看護学校に進学。しかし、免疫力低下(副作用)により常時マスクを着用し、肝機能数値も上昇している。

### 7 救済制度の申請

申請していない。

## 〇ー1番

(平成26年6月現在)

### 1 はじめに

私は、平成7年生まれの19歳です。子宮頸がんワクチンを接種してから、特に全身を耐えがたい痛みが襲うようになり、関節型若年性突発性関節炎（若年性関節リウマチ）と診断されました。現在は月1回の生物製剤投与等の治療により（このことによる副作用については後述します。）、なんとか症状は落ち着きをみせ、この春から看護学校に通うことができています。しかし、それまで健康であった私の身体は一変し、苦しく辛い思いをしています。また、将来のことを考えると不安でたまらなくなります。

以下、私の身体に起きた事についてお話ししたいと思います。

### 2 子宮頸がんワクチンを接種する前

私はワクチンを接種する前までは健康面で特に問題はなく、中学3年生の時には皆勤賞をもらうほどでした。ピアノは幼稚園の頃から10年以上続けており、高校に入学した時には、音大への進学を目指していました。

### 3 子宮頸がんワクチン接種に至る経緯

平成23年4月、私が高校1年生の時に、自治体から子宮頸がんワクチンの案内文書と問診票が自宅に届きました。8月には広報紙にてワクチンの準備が整った旨の案内があり、3回接種するには半年程度必要である事、助成は翌年の3月末までであり、その後の助成は未定であるため、接種希望者は早期に接種するようにとの内容が書かれていました。

学校の友達も受けると言っていたことや、「これさえ打てば子宮頸がんにはならない。」「無料接種で1つのガンになる可能性をなくせるのはすごいことだ」と思い、私も受ける事にしました。むしろ当時は「打たないとダメだ」くらいに思っていました。

インフルエンザワクチンと同じようなワクチンと認識しており、副作用があることや、ワクチンの効果が限られていることなどは全く知りませんでした。

### 4 ワクチンの接種と症状経過

(1) 平成23年8月16日、子どもの頃からのかかりつけ医のA医院で、サーバリックスの1回目の接種を受けました。接種前に、医師からワクチンについての説明文書は交付されませんでしたし、口頭での説明もありませんでした。医師からは「筋肉注射だから痛い」ということだけ聞きました。

1回目の注射は非常に痛かったのですが、打たなければいけないと思っていたので、我慢しました。接種後1週間以上、患部が熱を持ち、腫れや、ジンジンする痛みが続きました。また、生理の時に頭痛、腹痛、腰痛、むかつきといった症状が重くなり、それまで生理時に痛み止めは飲んだ事はなかったのですが、飲まなければ我慢が出来ないほど酷くなりました。おりものの量も増えました。

(2) 10月15日の2回目の注射も、1回目と同様の痛みがありました。接種直後には特段1回目と異なるような異常はありませんでした。

しかし、2回目の接種から8日後、突然足首が腫れて痛み出しました。そしてその後、両膝、両肩、両手首と、次々と関節が痛み出したのです。

接種から17日後の10月31日には、右手の痛みでペンも握れなくなり、両膝の痛みから歩行が困難となりました。近所のB整形外科を受診し、レントゲン撮影もしましたが原因は分からず、痛み止めと湿布をもらって帰宅しました。

1週間が経過しても痛みは引かず、びっこを引いてようやく歩けるという状態でした。

- (3) 11月8日の朝4時頃、これまで以上の右手の痛みで目が覚めました。午後には右の手首や指が通常の倍近く腫れて太くなりました。再度B整形外科を受診したところ、初めて医師から関節リウマチの可能性を指摘されました。血液検査の結果から、関節リウマチと診断されました。

湿布や痛み止めをもらいましたが、これらは全く効果がありませんでした。

膝の痛みがあまりに強く、腫れも酷いため、注射器で膝の水を抜いてもらったところ、黄色く濁った液体が出ました。

薬が全く効かず、耐え難い痛みと、自分の身体がどんどん変わっていくことに非常に恐怖を覚えました。

- (4) 11月24日、C総合病院のリウマチ科に転院しました。そして、同月28日から12月6日まで、入院し、若年性突発性関節炎（若年性リウマチ）と診断されました。服薬治療を受け、月に一度通院するようになりましたが、病状は一向に良くなりませんでした。

家では食事とトイレ以外はほぼ寝たきりの状態となり、もちろん通学することもできませんでした。痛みで腕が曲がらず、一人で洋服を着替えることもできません。ボタンをかけることもできません。手首の痛みでお箸が使えません。食事は、フォークを使って何とかできる状態です。そのフォークですら、金属の物は重くて使えないため、プラスチック製のものを使用しました。ガラスコップも同様に持つことができず、プラスチックのコップを使用しました。顎が痛み、口が開かず、食べ物を口に入れるのも大変でしたし、食べる意欲もなくなりました。体重が5kgも減りました。

両手首が痛み、お風呂で身体を洗うことも、髪を洗うこともできません。

全身が痛み、ベッドから起きあがれないときは、母が身体を支えて起こし、トイレまで抱きかかえられるようにして行きました。寝返りもままなりません。

- (5) このような苦しい症状が続き、服薬治療では効果がでないため、主治医と相談し、春休みに入院をして生物学的製剤を試すことにしました。

主治医からは、生物学的製剤の投与を開始するとワクチン等の接種ができなくなるため、ワクチンを受けるのなら生物学的製剤の投与開始前にとわれました。当時は、ワクチンによってこのような状態になったとは思ってもよらなかったため、平成24年2月25日、3回目の注射を受けました。

そして、3月7日から9日までC総合病院に入院し、生物学的製剤の投与、治療を受けました。現在まで、毎月一度通院し、血液検査や尿検査、診察、生物学的製剤の点滴を行っています。

- (6) 幸い、最初に試した生物学的製剤が私の身体にあい、寝たきりの状態からは解放されました。それでも体調の悪い日は多く、毎日常に、膝や足首、手首、肩、首、顎など、どこかが痛みました。

母の送迎もあり、高校の2年次の4月から通学も徐々に可能になりましたが、高校3年の2学期までは体調の悪い日も多く、欠席することも多々ありました。

寒い日はリウマチ特有の「朝のこわばり」の症状があり、朝6時に起床してもベッド

から起きあがるのに時間がかかりました。手足の関節を温めないと動かすことができません。腕が首の後ろまで回らないため、制服の襟を出すことができません。身体が疲れやすく、疲れると症状が悪化し関節の痛みが酷くなりました。また、手首が痛むときはペンが握れないためノートが取れません。試験を受けられないこともあり、勉強に支障が出ました。遠足や体育大会などの学校行事に参加できないこともありました。

そんな中、高校の先生や友人は、私の症状に非常に理解を示して下さいました。教室移動が少ないように調整して下さいったり、洋式トイレを使用できるようにして下さいったり、廊下に手摺りやスロープを設置して下さいったり、保健室でのテストの実施、レポート提出での単位認定等、様々な配慮をして下さいました。そのおかげで、平成26年3月、なんとか無事、卒業することが出来たと思っています。

## 5 現在の症状

現在、毎月一度通院し、血液検査や尿検査、診察、生物学的製剤の点滴を行っています。生物学的製剤による治療の効果が少しずつ出始め、症状は落ち着くようになりました。それでも、身体のいずれかの関節が痛み、また、非常に疲れやすい状態です。

生物学的製剤の投与により、免疫機能がおさえられているため、感染症に非常にかかりやすくなりました。また、一度かかると肺炎など重症化しやすく、実際に肺炎になったこともあります。そのため、外出する際はマスクをしなければならず、とても息苦しい思いをしています。肝臓の数値が悪くなったり、抜け毛が多くなったりもしています。

そして、何より将来のことを考えると不安で一杯です。

現在、症状は落ち着いていますが、関節リウマチは完治することのない病気であり、生物学的製剤が一生治療に効果があるものでもありません。薬が効かなくなると別の新しい生物学的製剤に切り替えねばならず、そのためには必ず入院治療が必要となります。場合によっては、全ての生物学的製剤が私に効かなくなることあるかもしれません。また、使用している薬は奇形を発するため、薬の投与を継続している限り妊娠・出産は望めません。治療費は毎月一度の通院につき、検査と点滴で最低10万円が必要です。

私は、身体中の関節の痛みには耐えながら、感染症の恐怖に怯えながら、マスク姿への周囲の視線や不自由さに耐えながら、一生過ごさねばなりません。そのうえ、経済的負担も多大です。現在は、小児慢性特定疾患が認められているため、一部の負担ですんでいます。しかし、来年20歳になればこれが認められず、健康保険での3割負担の支払となります。精神的、肉体的苦痛以外に、経済的苦痛まで生じることとなります。

## 6 最後に

大好きなピアノを弾き、音大への進学を夢見て高校に入学しました。それがワクチンを接種したことにより、2学期には、私の身体も生活も夢も一変してしまいました。

平成25年4月9日の朝日新聞の記事を読み、ワクチン接種と発病の時期が近いことに気付きました。子宮頸がんワクチンが原因でこのような身体になってしまったと思っています。

私は自分がりウマチという病気になったことで、将来看護師になり、同じように病気で苦しむ方々のお役に立ちたいという思いから、看護学校へ進学しました。しかし、毎日の通学は思ったよりも大変で、帰宅すると疲れて横になってしまうこともあります。また、授業や実習では体力を使うことも多く、無事に卒業できるのか不安です。

天気の悪い日や寒い時期は関節の痛みが強く、未だに膝や手首も腫れますが、学校を休むわけにはいきません。そのような日は本当に辛く、病気の自分を思うと悲しくなります。このように、毎日ぎりぎりの体力で通学しているような状態です。

もう、私の健康な身体は戻ってきません。

学校では、ワクチンを打った後に生理が重くなったという友達が多くいました。関連性は分かりませんが、別の学年にも、若年性関節リウマチに罹患した方がいます。主治医の先生からは若い女の子でリウマチが最近増えていると聞きました。

私のような被害者をこれ以上出して欲しくありません。私と同じような被害者が他にいないかどうか、ワクチン接種者全員の追跡調査を強く望みます。

そして、一日も早くこの問題を解決し、救済してくださるよう望みます。

## 〇ー2番 要約

(平成26年7月現在)

### 1 被害者

平成8年10月生。接種時中学校3年生(14歳)、聴取時17歳。大阪府在住。

### 2 ワクチン接種前の健康状態等

健康。学校を休むことはほとんどない。バレーボール部をやめてからは美術部所属。

### 3 接種

サーバリックス 3回(H23.9.28、H23.10.28、H24.3.31)

### 4 経過概要

平成23年 9月初め 中学校から子宮頸がんワクチンについての案内受けとる。

9月28日 サーバリックス接種1回目。

10月28日 サーバリックス接種2回目。

平成24年 3月31日 サーバリックス接種3回目。

5月 右指の関節痛・腫れ強くなる。リウマチ検査は陰性。

平成24年 夏・秋 右股関節の痛みで足がしびれる。

平成25年 7月 手足のしびれを訴え、救急外来受診、脳CT異常なし。

夏頃より 学力低下、記憶力低下。

12月 3日 阪大病院にて「痛みは気のせいだ」と言われ、精神的に不安定になる。

平成26年 2月 頃 11日欠席(高2)。倦怠感が強く、20時間/日の過眠。

3月10日～3月14日 入院(関東の病院)

4月30日～5月 1日 入院(関東の病院)

### 5 現在の状況・症状

平成26年6月頃より、民間療法により、痛み、しびれなどの症状は軽快している。

### 6 受診医療機関

5か所

### 7 所見・診断等

脳MRI、血流検査により高次脳機能障害。

### 8 救済制度の申請 申請していない。



## 〇－２番 母（大阪府東大阪市）

（平成２６年７月現在）

### 1 はじめに

私は、東大阪市に住む１７歳の娘（平成８年生まれ）の母です。

娘は、平成２３年９月から平成２４年３月にかけて、子宮頸がん予防ワクチンのサーバリックスの投与を３回受けました。その後、娘は、子宮頸がん予防ワクチンによる副反応の被害を受けていますので、以下、お話しします。

### 2 ワクチン接種前の状況

娘は、特に大きな病気をしたこともない元気な子で、学校の出席状況は、たまに風邪をひいたときに２日ほど休むことがある程度で、それ以外の理由で休んだことはありませんでした。

小学校の時は、３年生の時から３年間ソフトボールを続けていました。小学校６年生の運動会では、男の子をさしおいて応援団長をさせてもらい、一生懸命練習していました。負けず嫌いで頑張り屋の明るい女の子でした。

中学校に入ってからバレーボール部に所属して頑張っていました。スポーツで酷使しすぎたことと、骨の間のひずみがあったことで、右肩をいためてしまい、ドクターストップがかかってしまいました。

その後は、美術部に所属して、大好きな絵を描いていました。

以上のとおり、スポーツが原因で右肩をいためて整形外科にかかったことはありますが、日常生活・学校生活には何ら支障はありませんでした。

### 3 ワクチン接種の経緯

平成２３年９月頃、通っていた中学校から、子宮頸がん予防ワクチンの接種を勧める手紙をもらいました。東大阪市保健所が発行した書面だったと思います。

全額公費助成があり無料で受けられて、子宮頸がんを予防できる夢のようなワクチンだと思いました。ただ、公費助成は期間限定のもので、平成２３年９月末までに一回目の接種をしないと、助成期間中に３回全部の接種を終えられないということでした。

私は学校から予防接種を受けるようにという勧めがあったこと、今なら無料で予防接種を受けられ子宮頸がんを防げると思ったことから、娘に子宮頸がん予防ワクチンを受けさせることにしました。

### 4 ワクチン接種時

学校からもらった書類の中に、子宮頸がん予防ワクチンの接種ができる医療機関一覧のようなものがありましたので、その中から自宅近くの家出医院を選び、サーバリックスを三回接種させました。

接種日は、平成２３年９月２８日、同年１０月２８日、平成２４年３月３１日でした。ワクチン接種にあたり、医師や看護師、薬剤師から、特段の説明はありませんでした。学校からもらった文書と予診票の記載を読んだのと、ワクチンに関するリーフレットを渡されたくらいです。

接種の際は、私も付き添っており、接種後３０分ほど椅子に座って様子を見てもらって

ましたが、意識を失うようなことはありませんでした。

ワクチン接種時に、特に強い痛みを感じることはなかったようで、筋肉注射なので普通の注射よりはやや痛いという程度でした。

3回の接種のたびに、注射部位にだるくて痛い感じが残りました。この症状は2日から3日ほど続きました。

また、1回目の接種の後から、右手指の関節に痛みが生じていたようですが、娘もまさかワクチンが原因だとも考えていませんでしたし、まだ症状がそれほどひどくなかったこともあって、私に右手指の痛みのことは話してきませんでした。そのため、2回目、3回目もワクチンの接種を受けました。

## 5 ワクチン接種後の症状の経過

### (1) 右手指の関節痛・腫れ

3回目の接種を受けた後の平成24年4月頃から、右手指の関節痛がひどくなり、同年5月からは右手指の関節が赤くなって腫れ、指関節が上と横に盛り上がったような状態になって腫れが引かなくなりました。

以前より痛めた右肩を診てもらっていた貴島病院整形外科で診ていただいたのですが、貴島病院からは、関節が柔らかいからではないかと言われたただけでした。

しかし、指の関節が明らかに腫れて盛り上がっているのも、私はおかしいと思い、平成24年5月31日頃、五島整形外科クリニックを受診し、リウマチの検査を受けました。結果は陰性で、インナーマッスルを鍛えるしかないのではないかとされましたので、これまでにかかっていた貴島病院で、インナーマッスルを鍛えるためのリハビリを受けることにしました。

### (2) 股関節等の痛みの出現

平成24年夏と秋には、娘は、今度は右股関節の痛みを訴えました。右股関節が痛いために、歩行もスムーズにできず、右足をひきずるようにして歩くことがありました。

そのため、平成24年冬頃、貴島病院整形外科でレントゲンを撮ってもらったのですが、原因ははっきりせず、やはり関節が柔らかいことが原因ではないかということで、インナーマッスルを鍛えるリハビリの回数を増やしました。

他にも、娘は、肩や膝、足首等の痛みを訴えており、痛みの場所はその時によって違いました。

### (3) 手足のしびれの出現

平成25年7月頃、娘が高校から帰ってきた後、学校で手がしびれたと言いました。症状はいったんおさまっていたようですが、その日の夜、娘が、また手がしびれてきて、今度は足先もしびれてきたと言いました。

私は、しびれという症状を聞いて、脳に原因があるのではないかと思い、救急病院などを教えてもらえる電話番号に電話をかけて相談しました。すると、近鉄瓢箪山駅近くにある若草第一病院を紹介してもらえ、ちょうど当直の医師がいらっしゃるということだったので、救急外来を受診しました。

若草第一病院では脳のCTを撮ってもらいましたが、異常はないということで、症状が一週間ほど続くようなら、整形外科で末梢神経の検査を受けてみるようアドバイスを

受けました。

その後も娘の手足のしびれは続いてはいたのですが、20～30分ほどしびれたと思ったら止むという具合で、1～2週間症状があったと思ったら、またしばらく症状が出なかったりという具合でしたので、結局、整形外科での末梢神経の検査を受けないままとなりました。

#### (4) その他の症状

そのほか、娘は、ワクチン接種後から、倦怠感、めまい、立ち眩み、ひどい頭痛、ニキビの悪化といった症状を訴えたり、他の生徒は特に不具合を感じていない程度の黒板の光の反射を眩しいと言うようにもなりました。風邪を引いても以前より治りにくく熱も下がりにくくなりました。

娘は、3回目のワクチン接種直後に高校に進学し、高校1年生の時は真ん中くらいの成績でしたが、その後記憶力が低下し、高校2年生の夏（平成25年夏）頃からは、成績も下がってきました。

#### (5) ワクチンが原因ではないかと知った経緯

平成25年秋頃だったかと思いますが、ニュースで子宮頸がん予防ワクチンによる副反応の問題を知りましたが、不随意運動と失神が中心の報道でしたので、娘の症状がワクチンの副反応だとすぐには思いませんでした。

しかし、よくよく考えてみれば、身体のあちこちの痛みも、手足のしびれも、眩しがる、立ちくらみその他の症状も、全て子宮頸がん予防ワクチンを受けた後に出始めた症状だったので、だんだん、娘もワクチンの副反応ではないかと考えるようになりました。

そして、平成25年10月頃、東大阪市の保健所に問い合わせをし、厚生労働省がワクチン後の痛みについて診てもらえる医療機関を紹介しているホームページを教えてもらいました。

ワクチン後の痛みに対応する病院で診てもらうためには、紹介状が必要でしたので、まず、かかりつけでありワクチン後の症状も診てもらっていた貴島病院に紹介状の発行をお願いしました。しかし、ワクチンの副反応ではないかという話をすると協力的でなくなり、ワクチンを打ってもらった病院で書いてもらうようにと言われました。

そこで、今度は、ワクチンを打ってもらった家出医院に紹介状を書いてもらうことにしました。家出医院では一応紹介状を書いてくれるには書いてくれましたが、ワクチンの副反応の話をすると、そんな人他にはいないのにと嫌みを言われました。

#### (6) 大阪大学医学部附属病院麻酔科受診

平成25年12月3日、ワクチン後の痛みに対応する医療機関としてホームページで紹介されていた大阪大学医学部附属病院（以下、「阪大病院」といいます。）麻酔科の予約をとることができましたので、阪大病院を受診し、柴田政彦先生に診ていただきました。

子宮頸がん予防ワクチン後の痛みについて対応してもらえる病院だということで、娘の症状の経過などを詳しく聞いて下さるのかと思ったら、先生の対応は全く期待とは異なるものでした。

柴田先生は、私たちの話など聞くこともなく、医師の10人に8人は痛みは気のせい

だと言います、患者が安心するから薬を出すだけで効果はない、病院は金儲けのためにCT等の検査をするだけ、一回の検査をするだけで何万円も儲かるんですよ、検査入院をして病理解剖で組織を切り取って、その切った部分の痛みを耐えたり感染症の心配をしますか、とおっしゃったのです。

厚生労働省健康局が、子宮頸がん予防ワクチン接種後の痛みについて診察をする医療機関として、全国11カ所定めている医療機関の一つだったのに、このような話をされ、私も娘もとても傷つきました。

特に娘は、阪大病院を受診した後、痛みなどの症状を感じるのは自分がおかしいからじゃないのかと思うようになり、精神的にも不安定になってしまいました。

柴田先生からは、一応リウマチの検査を受けてみたらという話もあり、平成25年12月18日にリウマチ検査の予約はしていたのですが、娘は阪大病院にはもう行きたくないと言い、結局受けませんでした。

柴田先生の診察も、平成26年1月28日に予約してはいたのですが、娘は結局受診せず、私だけが病院へ行きました。私は、柴田先生の言葉で娘が傷ついたことを、柴田先生に直接伝えました。柴田先生は、そういうつもりではなかったと謝罪されましたが、ワクチンの副反応なんていうことはあり得ないのだ、ニュースで問題になっている不随意運動などもワクチンの副反応というのはおかしい、心の問題だと主張されました。

何故そのようなことが言い切れるのだろうかという疑問に思いましたが、これ以上柴田先生とやり合っても仕方がないので、次回以降は予約せず、以後阪大病院は受診させていません。

なお、阪大病院を受診した後に、元々のかかりつけの貴島病院に、阪大病院を受診した経過も含めお話したところ、貴島病院の先生からは、阪大でダメなもん、うちで検査はできないと言われてしまいました。

#### (7) 症状の悪化（平成26年1～2月）

平成26年1～2月頃は、娘の症状が特にひどくなりました。

1月にインフルエンザにかかったことがきっかけになったのかわかりませんが、今までにましてひどい倦怠感、頭痛が続き、一日中寝ているようなこともありました。日によっては1日に20時間も寝ていることがありました。そのため、2月は11日も高校を欠席しなければならなくなり、学校に行けた日でも遅刻が増えました。

生理不順で1ヶ月半生理がなかった後、2月に来た生理では生理痛がものすごくひどく、夜中の3時まで下腹部をさすっていないと痛み止めの薬も効かない状態で眠れませんでした。

記憶力の低下だけでなく、会話の中で言葉が出ないことが増えました。そのため、平成25年（高校2年生）の夏以降成績は下がっていましたが、高校2年生の3学期末の時点では1つ単位が足りず、進級できないような状態になってしまいました。なお、後述のとおり3月に受診した病院に出してもらった診断書を学校に提出し、学校側に配慮をしてもらった結果、ひとまず高校3年生には進級させてもらえ、追認考査を受けさせてもらえることにはなりました。

#### (8) S病院入院と診断

平成26年1月に、全国子宮頸がん被害者連絡会に相談し、子宮頸がん予防ワクチン

後の副反応についてきちんと診てもらえる関東地方の病院（「S病院」といいます。）を紹介していただきました。

そして、学校の期末試験後の休みを利用して、平成26年3月10日から同月14日の間、S病院に検査入院しました。

S病院では、脳のMRI検査、脳の血流検査、髄液検査を受けました。髄液検査を受けた後は、ひどい頭痛があったのですが、学校の追試を受けなければならなかったため3月14日には退院しなければなりませんでした。

MRIでは海馬に軽度の炎症反応があること、脳の血流検査では脳の下の方の血流が悪いことがわかり、ワクチン関連生の脳炎だと言われました。

最終的に、「高次脳機能障害」という診断を受けましたので、その診断書を高校にも提出し、高校3年生への進級について配慮してもらえた次第です。

また、平成26年4月30日～同年5月1日にも、連休を利用して、今度は心理検査のため、S病院に検査入院しました。

S病院からは、ステロイド・パルス療法を勧められたのですが、ニュースなどで知る症状の重い方のように不随意運動がある訳ではないですし、さらにステロイドという薬を娘の身体に入れることに躊躇してしまい、結局、ステロイド・パルス療法は受けないことにしました。

それ以来、S病院は受診していませんので、髄液検査と心理検査の結果は聞くことができないままとなっています。

## 6 現在の症状

平成26年5月頃、被害者連絡会で知り合った被害者の方から、ある整体の先生をご紹介いただき、それ以来、次の民間療法を受けています。

副腎を鍛える整体の施術（1万円/回、2週間に1回）

核酸と水素のサプリメント（3万円/月）→その後ミドリムシ、ビタミン（1万円/月）に変更

マコモ茶、麦芽等（1万円/月）

デトックス効果のある水（5000円/ボトル）

その効果があっただけか、平成26年6月頃より症状は軽くなっており、学校にも休まず朝から行くことができるようになってきました。朝も起きることができるようになっています。

## 7 学校生活

### (1) 通学

高校への通学手段は、自転車で4キロ、又はバスと電車でした。

しかし、症状が出てからは、通学の負担が大きく、私が車で送迎しています。

最近は調子がよいので、時々バスと電車で通学することもあります。

### (2) 進級・進学

高校1年生の時は真ん中くらいの成績だったのですが、高校2年生（平成25年）の夏頃から記憶力低下等で成績が落ち、高校2年生の学年末考査で、進級判定にひっかかってしまいました。

平成26年1月から具合が悪く欠席も増えていたこと、記憶力が低下したことにより、1教科単位を取ることができなかつたのです。

学年部長・担任には、高次脳機能障害の診断書を提出し、今の病状を考慮していただくようお願いし、平成26年の夏前に追認考査を受け、高3に進級できることとなりました。

将来は大学の看護学部へ行くつもりで、現在の高校を選んだのですが、成績が下がってしまったことで、美容方面へ進路の変更を考え、専門学校へAO入試の願書を出したところです。

## 8 心情等

危険のないワクチンを受けられるものと信じており、国が勧めておいてこのような副作用が出るなんて、あつてはならないことです。

現在、娘の症状は軽快してきていますが、今後症状が再び悪化しないとも限らないという不安はぬぐえません。

## 〇ー11番 要約

(平成26年10月現在)

- 1 被害者  
平成10年8月生。接種時中学校1年生（13歳1ヶ月～13歳7か月）。現在16才。
- 2 ワクチン接種前の健康状況等  
健康（ワクチン接種前の通学は一般的な病欠以外なし）。弓道部に所属。アレルギーなし。
- 3 ワクチンの接種状況  
サーバリックス 3回（H23. 9. 3、H23. 10. 28、H24. 3. 27）
- 4 経過概要  
平成23年9月3日 近医にて1回目のワクチン接種（接種部位左腕）  
接種部位に強い痛み、腫れ、頭痛、微熱、腹痛  
10月28日 同医院にて2回目のワクチン接種（接種部位左腕）  
接種部位に強い痛み、腕の腫れ、頭痛、微熱、腹痛、強い体のだるさ。  
平成24年3月27日 同じ医院にて3回目のワクチン接種（痛みのため接種部位は右腕）  
腕の痛み、腫れ、頭痛、微熱、腕が上がらない、強い体のだるさ  
4月 手足の震えや痺れが発生。生理不順、リンパの腫れ。  
近医を受診するも原因不明。足のもつれ。右半身の痺れ。関節の痛み。  
味覚がなくなる。計算障害など症状が重くなる。  
平成25年6月 A病院で診察。MRI検査。各科で診察するも原因不明。  
12月 B医療センターでMRI検査及び神経の検査も異常なしと診断。  
平成26年1月 C大学附属病院で診察を受ける。ワクチンの副作用の疑いありと診断。  
2月 C大学附属病院に検査入院。ヒステリーや自立神経の問題と診断。  
てんかんの薬・漢方薬を処方される。薬が合わず、あまり服用せず。  
3月 D病院、E病院診察、結果、「繊維筋痛症」と診断。  
3月 全身の不随運動におそわれ、A病院を受診する。F大学病院に紹介。  
4月 F大学病院神経内科を受診。子宮頸がんワクチンとの因果関係ありと診断。メチコバールの処方を受け、徐々に症状回復。  
8月 身体状態がかなり改善され、通常生活を送れるほどに回復。但し、易疲労、微熱が出やすい、等の症状は残存。  
9月・10月 手のしびれ、微熱がぶりかえし。通学は継続。
- 5 現在の状況・症状  
メチコバールの処方により症状が改善。日常生活を送れるようになったが、症状のぶり返しあり。
- 6 受診医療機関の数・診療科  
11医療機関（神経外科、小児脳神経外科、神経内科、整形外科、内科、麻酔科）
- 7 救済制度の申請 申請していない。（申請できないと言われたため）

## 〇－１１番

(平成26年10月現在)

### 1 はじめに

私は平成10年8月生まれで、中学1年生の9月に初めて子宮頸がんワクチンを打ちました。

このワクチンを打つ前は、私は小学校でも中学校でも、学校を休むことはほとんどなく、中学1年生の春からは弓道部に入部して、平日も休日も弓道の練習を続けていました。弓道では初めて出場した県大会でも良い成績をおさめ、当時は顧問の先生から私の頑張りを随分認めてもらっていました。

その他にも、ドラムやピアノ、習字などの習い事をしており、中学1年生のときには、学校行事であった合唱コンクールでピアノの演奏と指揮をしました。

このように私は積極的にいろいろな活動をしていたのですが、一番好きなことは演劇でした。市内の劇団に入団して、練習に参加しましたし、何度か東京までオーディションを受けに行ったこともありました。

私は、13才でまだ将来のことをはっきりと決めていたわけではありませんでしたが、健康な身体さえあれば、がんばっていろいろなことにチャレンジして、何にだってなれるんだと思っていました。

### 2 ワクチンを受けることになった理由

中学1年生(平成23年)の秋に、学校で子宮頸がんワクチンに関する手紙を配られました。学校では、子宮頸がんがどんな病気かということや、このワクチンを何故打つ必要があるのか、という説明はありませんでした。

けれども、私も周りの女子の友達もみんな、学校で配るワクチンの手紙だから、全員が受けなければならないんだ、と思っていました。

### 3 ワクチンを打たれたときの状態

#### (1) 1回目

平成23年9月3日、私はお母さんに付き添われて、近所のかかりつけの医院で1回目の注射を受けました。

注射を打つ前に、お医者さんや看護婦さんからはこのワクチンがどんなワクチンかという説明は何もなく、ただ注射を打たれただけでした。

私は、これだけは声を大にして伝えたいのですが、注射を打たれることも、点滴を打たれることも、決して好きではありませんが、全く怖くないし、恐怖感もないです。今までも、小さい頃からも、予防接種や注射を打たれたことは何度もありますが、その後で体調がおかしくなったおことは一度もありません。

けれども、この子宮頸がんワクチンを打った後は、今までに感じたことのない、腕に強い電気が走るような痛みが起きたことをはっきりと覚えています。

そして、ワクチンを打たれた後はすぐに気分が悪くなり、吐き気と頭痛がつらくて、家に帰ってからもずっと横になって休まないといわれませんでした。

1回目の注射の後、少なくとも1週間は打った腕が痛み、腫れが続きました。また、頭痛や微熱、腹痛が続きました。



そのうち、徐々にこれらの症状は治まったのですが、それでも手足がだるくて疲れやすく、朝に起きるのがつらくなりました。なんとか、学校に行っても授業を受けるのがしんどくて、先生の言葉に集中できませんでした。

(2) 2回目

2回目のワクチンは平成23年10月28日に打ちました。私は1回目のワクチンの後があまりにも辛かったので、お母さんにもうこのワクチンは打ちたくない、と言いました。けれども、お母さんは私に、このワクチンは3回打たないと効果が出ないし、今やめてしまったら最初にしんどい思いをしたことが無駄になってしまう、と言いました。私は、我慢しないと仕方がないと思って、諦めて2回目のワクチンを打ってもらいました。

2回目の後もやはり、1回目と同じように、電気が走るような強い痛みがあり、ワクチンを打った後はすぐに気分が悪くなり、吐き気や頭痛ができて、家に帰るとすぐに横になって休みました。

そして、注射を打った腕の痛みや腫れが続き、頭痛、微熱、腹痛が続き、1回目よりも強いからだのだるさを感じました。この腕の痛みや腫れは1、2週間程度続き、徐々に治まりました。

しかし、手足や身体のだるさやしびれが無くなることはなく、しんどさをずっと感じるようになりました。

(3) 3回目

3回目のワクチンは平成24年3月27日に受けました。お母さんは、4月までにワクチンを受けないと有料になってしまうと言い、私もこれまで2回もしんどい思いを我慢したのだから、あと1回なんとか我慢しようと頑張って受けたのです。

3回目のワクチンの後の症状はこれまで以上にひどくなりました。

ワクチンを打った後、同じ強い痛み、吐き気、頭痛がして、腕が腫れ、今度は腕があらなくなってしまうしました。この状態は約1ヶ月ほど続きました。

そして、腕が上がるようになってからも、身体が強いだるさが消えることはなく、朝、学校に行くのもつらく、学校に行っても授業に集中できませんでした。大好きだった弓道部の練習も参加できなくなりました。学校から帰るととにかく身体を横にしないと行かれず、食事のとき以外はずっと部屋でベッドに横になっていました。

私は、ワクチンを打った後で自分の身体がこんな風にしんどくなってしまったのは、ワクチンが原因ではないか、と思う気持ちもありました。けれども、ワクチンを打ったらこんなに身体がおかしくなる、という話しは誰からも聞いたことはなかったので、私の方がおかしいのかと考えていました。

こんな状態だったので、学校の成績も急に下がり、弓道部の練習に参加できず、弓道の顧問の先生からは、私がやる気をなくしていると思われ、叱られました。

また、お父さんから、ベッドでだらだら生活しているから成績がさがったのではないかと、もっとやる気をださないと、言われたりして、身体のだるさを分かってもらえませんでした。とてもつらかったです。

3回目のワクチンの後に感じた身体の異常は、平成24年4月から平成25年6月頃にかけて、だんだんと様々な多くの症状が生じるようになり、その程度も強くなっていきました。

具体的には、強い身体のだるさ、腕のしびれ、右半身のしびれ、関節の痛み、足が上が

らない、目の奥を手でかき回されるような感覚、物がぼやけて見える、味覚がわからない、突然手がブルブルとふるえ出す、起きあがれない、計算ができない、手に力が入らなくて、片手で鉛筆が支えられない、、、などがあり、数えたらきりがありませんでした。

私がこのような状態になって、ようやく両親も私の身体がおかしくなっていることを分かってくれました。

#### 4 学校生活

1回目、2回目のワクチンを打った後も体調が悪くなっていましたが、早退したり、保健室を利用したりして、学校には何とか通っていました。部活動にもなんとか参加しましたが、思うような練習はできませんでした。

ところが、3回目のワクチンを打った後は、学校に行くために起きあがれない日が増え、とにかく強い痺れと身体のだるさ、関節の痛みで何もできなくなりました。当然、欠席や遅刻が増えました。1回目、2回目のワクチンの後は何とか続けられていた弓道部の練習もほとんど参加できなくなりました。平成24年6月、私はやむなく弓道を続けることを諦め、退部しました。弓道部の顧問の先生や担任の先生などからも、さぼっている、わがままと言われていました。

中学3年生の春には、物がぼやけて見えるようになり、学校の視力検査で右目の視力は測定不能と言われました。

吐き気や微熱、目の奥をかきまわされるような頭痛も現れるようになり、ワクチンを打つ前は1ヶ月に1回、正確だった生理も、1ヶ月に2回あたりと、生理不順になりました。

階段を一人であがろうとしても足がうまくあがらず、友達に助けてもらうこともありました。

この頃には、学校にはほとんどお母さんの車で送ってもらっていました。このようにつらさを我慢して、学校に着いてもとても教室で机に座っていることができず、保健室で1日寝て過ごし、早退していました。

結局、中学3年生（平成25年）春以降、学校の授業にはほとんど参加できませんでした。そして、この頃から、右の手のひらが突然自分の意志とは関係なく震えだし、止められなくなる症状が現れました。最初の頃は少し我慢しているとやがて手の震えはおさまりました。

やがて、鉛筆を持って指に力が入らず、文字をこれまでのように、バランス良くきちんとかけなくなっていきました。学校の階段も足があがらずのぼれなくなりました。

#### 5 病院での対応

私の両親は共働きで、あまり心配をかけたくなかったので、3回目のワクチンを打った後、中学2年生の約1年間、学校での身体のしんどさをあまり両親には話していませんでした。

けれども、中学3年生になった後の平成25年6月頃には、もう自分一人では我慢できなくなりました。私はお母さんに、病院に連れて行って欲しいと頼みました。

最初は近くのA医院に行きましたが、私の症状を先生に話ししても、検査の結果は特に異常はなく、私の状態を理解してもらえませんでした。

次に少し離れた公立のB病院を紹介してもらい、その病院では脳神経外科、眼科、婦人科、小児科などにかかり、脳のMRIなどあらゆる検査をしてもらいましたが、やはり検査結果には異常はなく、原因は不明でした。病院では、私の身体のだるさ、手の震え、足があがらないことなどを訴えても、気分を変えたら治るのではないかと終わりました。

身体のだるさや頭痛、吐き気などが毎日続き、両親に手や背中をさすってもらいました。それでもどうにも我慢できなくなると、その都度病院に連れていってもらいましたが、結局、病院では原因がわからないと、治療は何もしてもらえませんでした。

平成25年12月頃、C医療センターを受診し、そこで子宮頸がんワクチンの副作用についての話を聞きました。同じ頃、お父さんも、子宮頸がんワクチンの後で手足がぶるぶると震えたり、歩けなくなっている少女のニュースを見ました。そしてお父さんがインターネットで調べた結果、私のこれまでの症状も子宮頸がんワクチン後の副反応と一致するということがわかりました。

そして、C医療センターで、子宮頸がんワクチン後に痛みなどの症状が出たときに受け入れる医療機関として、D大学附属病院の紹介を受けました。

平成26年1月に私はD大学附属病院を受診しました。

両親も私も、これまでほどの病院に行っても検査に異常がないから、私の方がおかしい、という対応でした。しかし、D大学附属病院は子宮頸がんワクチン後の症状を診てくれるところなので、初めて、きちんと対応してもらえる、話をきいてもらえる、検査して原因をつきとめてもらえる、と大きな期待と希望を持ちました。

平成26年1月終わりから2月にかけて、私はD大学附属病院に検査入院しました。私の担当になった女性医師からは、もうじき高校受験なのに、受験が嫌だから入院したいのか、あなたはわがままですね、親子関係に問題があるからこういう症状が出ています、ヒステリーです、などと言われました。結局、私の症状は自律神経失調症で、心因性の問題ということになりました。D大学附属病院ではてんかんの薬や漢方薬など多くの薬を処方されたのですが、とても飲める量ではありませんでした。

D大学附属病院で唯一良かったのは、診断書に「子宮頸癌予防ワクチン副作用疑い（全身倦怠感、右上下肢痛）」と書いてもらえたことでした。

というのは、この診断書を中学校に提出してから、学校の先生達がようやく私が仮病を使ってさぼっていたわけではなく、本当に身体がつかったことを理解してくれるようになったからです。

そして、以後は私の体調に学校側も配慮してくれるようになり、高校入試に際しても、私の体調に合わせて別室で受験することが出来ました。

## 6 E大学病院での治療

D大学附属病院では、私の症状は自律神経失調症という扱いでしたので、私のだるさも、身体の痛みも全く改善しませんでした。

私はこれまでと同じように身体がつかなくなると、近くのB病院に連れていってもらっていました。

平成26年2月20日頃、私は自宅で身体全体がぶるぶると震えだし、自分では止められなくなり、おばあちゃんが私をB病院に連れて行きました。待合室で診察を待つ間も私は自分を止めることができなくなり、待合室を歩き回ったり、横になったり、震えたり、

とじっとしていることが出来なくなりました。

結局この日は自分の身体を抑えられなくなる状態が2時間くらい続きました。

B病院でも私がなぜこのような状態になるのか分からないため、治療が出来ず、私の発作が治まるまで、ただ様子を観察するだけでした。

しかし、このときE大学病院の先生がこの病院に来ており、私の状態を診て、E大学病院を受診するように勧めてくれました。

平成26年3月末に、私はE大学病院の神経内科を受診しました。そこで、私は初めて、私の症状は子宮頸がんワクチンが原因であると、はっきり医師に認めてもらえました。そして、メチコバールの処方を受けました。

私は平成23年9月に子宮頸がんワクチンを打たれてから、このとき初めて、症状の原因に応じた治療を受けることが出来ました。

E大学病院で処方された薬を飲むうちに私の症状はどんどんと改善されました。

平成25年春以後、平成26年5月頃まで、私は小学校低学年の計算問題も解くことができなくなっており、身体のだるさ、頭痛、右半身の痛みやしびれに一日中ずっと悩まされていました。まだ味覚もおかしくなっていて、何を食べてもほとんど味がわかりませんでした。

しかし、平成26年夏頃からは本当に身体が楽になりました。

身体の上びれや痛みもほぼなくなり、味覚も回復しました。生理不順も治りました。

それまでは、頭の中に霞がかかっているようで、ものも覚えられなかったのが、世界がこんなにはっきり、理解できるのか、と感じられるようになったのです。

## 7 症状のぶり返し

E大学病院の治療後、私の症状は随分よくなり、現在は調子がよければほぼ普通に生活が出来るようになりました。

しかし、子宮頸がんワクチンを打つ前と比べれば、身体が疲れやすく、頻繁に熱を出すようになり、体調も崩しやすくなりました。

平成26年9月頃、突然、右手が以前のように痺れる症状のぶり返しがありました。

平成26年10月のつい先週にも、再び右手がだるくなり、微熱が出ました。実はこの症状は今もまだ治まっていません。

昨今の今頃と比べれば、本当に私の身体は楽になりました。しかし、実際に今でも、症状がこうしてぶり返しているのです、いつまた元のような重い状態になるかと思うと不安です。

そして、将来、自分はちゃんと妊娠できるのか、これが一番心配です。

## 8 あきらめたこと

中学校に入学してから私は弓道を始めました。

私はこの弓道という競技が本当に好きで、入部してから、今回のワクチンで体調を崩すまでは休まずに練習に参加し、一生懸命頑張ってきました。

実際、子宮頸がんワクチンを1回目、2回目に打った後でも、身体はつらかったのですが、どうしても上達したくて弓道の練習を続けました。

平成24年1月に初めての県大会に参加し、私は良い成績をおさめました。

1年生でこのように良い成績をおさめられたのだから、これからもっともっと練習して

頑張りたい、弓道を続けたいと強く思いました。

しかし、平成24年3月末に3回目のワクチンを打った後、私の身体は弓道を続けるどころではなくなり、平成25年の中学3年生の春以降、学校に通学するのめんどろ、やがて学校に通うこともままならなくなりました。

平成25年6月、私は弓道を諦めました。

もし、ワクチンの副作用がなければ、弓道を続けていたはずですが。こんな形で自分の目標を諦めることになったのは、悔しいです。

## 9 さいごに

私は、子宮頸がんワクチンを打った後に出た、私の症状が何だったのかをはっきりさせたい、

「気のせい」「痛みからのショック」など意味の和からに結果で終わらせてほしくない、と強く思っています。

今、私の症状は落ち着いています。

ニュースなどで重度の副反応が出ている子を見ると、本当にこのワクチンを推進した一部の大人達を許すことができません。苦しんでいる人たちを救おうとしない、真実を隠そうとする体質のこの国が一番残念です。

一日も早く、苦しんでいる人を、辛く哀しい日々を過ごしている人達を、早く暗いトンネルから抜け出させてあげてください。

私も両親も何かしてもらいたいとか、思っていません。

ただ、真実を世間の人たちに伝えてもらいたい。子宮頸がんワクチン接種後に副反応で苦しんで人生が変わった人が沢山いることを、少しでも多くの人達に分かってもらいたい。

そして、今後接種を完全に中止してもらいたい。ただそれだけを祈ります。

## K-8番 要約

(平成26年10月現在)

- 1 被害者  
匿名：1999年7月18日生 接種時中学1年生（12歳）現在15歳 福岡県北九州市在住
- 2 ワクチン接種前の健康状態等  
健康（ほとんど休むことなく通学、小学6年生のころからダンスを習う。）
- 3 接種  
サーバリックス2回（平成24年5月24日、同年8月2日）
- 4 経過概要  
2012年  
5月24日 1回目のワクチン接種。このときは接種時に通常より強い痛みを感じただけ。  
8月2日 2回目のワクチンを接種。直後から吐き気、寒気、疲労感を認め、その日のうちに接種した小児科を受診。  
8月末頃 接種した腕が上がらず、体を移動するような痛み、疲労感等が続いたことから、近隣の大学病院を受診し、CRPSと診断される。大学病院の系列病院にてリハビリ治療を受け、腕の痛みは緩和したが、頭痛、疲労感、寒気等の症状は治まらず。  
2013年  
1月29日 栄養療法外来を受診。サプリメントを処方される。  
1月30日 学校にて失神する。  
2月上旬頃 自宅にて失神する。近くの総合病院を受診するも、原因不明。  
2月18日～3月1日  
総合病院にて慢性疲労症候群と診断され、約2週間入院。同病院では栄養療法だけで症状の改善はなし。  
中1の3学期から休学。病状について友人らから理解されず、怠学と思われ、悩むようになる。その結果、次第に引きこもるようになり、自殺をほのめかすようになる。  
11月27日～2014年1月17日  
精神科病院に約2カ月入院し、適応障害と診断される。睡眠導入剤や漢方薬を投与される。同院にて初めてワクチンとの因果関係を指摘される。
- 5 これまでに発症した主な症状  
全身に移動する痛み、頭痛、疲労感、体の震え、動悸、腕が上がらない、足が動かない、生理不順、耳鳴り、聴覚過敏、めまい、記憶力の低下、無気力、不眠、過眠、視覚過敏
- 6 受診医療機関  
8か所（小児科、内科、麻酔科、整形外科、栄養外来、婦人科、精神科）
- 7 現在の生活状況  
2014年4月から通学再開するも、秋頃から症状が悪化し、9月下旬から再び休学。

## K-8番（福岡県北九州市）

（平成26年10月現在）

### 1 はじめに

私は、中学3年生で、北九州市に住んでいます。

中学1年生の春に、学校と北九州市から子宮頸がんワクチンの接種をすすめる案内のチラシをもらったことがきっかけで、平成24年5月に1回目のワクチンを接種し、その年の8月に2回目のワクチンを接種しました。

### 2 ワクチン接種後の症状

2回目のワクチンを接種した後のことです。私は、そのまま塾に行ったのですが、次第に体がだるくなり、吐き気を催し、さらには寒気もするようになりました。私は机につっぷしたようになって、上半身を起こすこともできなくなりました。

その後に記憶が飛ぶことが増えたこともあり、私はそれ以後のことはあまり覚えていないのですが、後で母から聞いたところによると、母が塾まで迎えに来てくれ、その日のうちにワクチンを打った病院に連れて行ったそうです。病院では、これといった原因はわからなかったと聞いています。

### 3 さまざまな病院を受診したこと

私の体調は、その後も良くなることはなく、体のだるさ、寒気、吐き気、頭痛、体を打ち付けられるような痛みが続きました。接種した右腕は痛くて上がらず、力も入らなくなり、鉛筆さえ持てなくなりました。また、2回目の接種の後から、2、3日前のことが思い出せなくなり、母に尋ねることが多くなりました。

そのため、私はさまざま病院に行き、たくさんの検査を受け、いろいろな治療を受けました。複合性局所性疼痛症候群（CRPS）と診断されたり、慢性疲労症候群と診断されたりしましたが、はっきりした原因はわかりませんでした。右腕は、リハビリのおかげで動かせるようにはなりましたが、頭痛や吐き気、きつさやだるさは治まりませんでしたし、過呼吸になったり、光が異常にまぶしく感じたり、耳鳴りがしたりしました。人の話し声が異常に大きく聞こえてびっくりするということが頻繁に起こりました。これまでに2度失神して倒れるということもありました。また、痛さときつさなどで24時や深夜1時になっても眠れないことが多くなり、朝になっても自分で起きることができず、母に上半身を起してもらわないとお昼の12時過ぎくらいまで眠り続けてしまうようになってしまいました。そのため、中学1年の3学期が始まった平成25年1月ころから学校にほとんど行けなくなってしまいました。

### 4 学校へ行けなくなったこと

平成25年の春に、中学2年生に進級しましたが、一日も学校に行くことができず、事実上休学することになりました。自宅で横になっていても、痛みやだるさが治まることはなく、何をしてもきつと感じる毎日でした。ただ自宅で横になって体の痛みやきつさに耐えるしかありませんでした。

私が学校を休むようになってから、友達から相手にされなくなり、私が体の痛みやだるさ、きつさのために学校に行けないことも、理解してもらえず、ずる休みをしていると思

われていました。

何をしても体の痛みやだるさ等はよくなり、学校にも行けず、したいこともできない。そんな毎日を過ごすうちに、私は誰にも会いたくないと思うようになり、次第に自分の部屋に引きこもりがちになりました。不安や辛さに襲われ、自傷行為をしてしまったこともありました。

家族にもひどく心配をされ、私も、このままでは自分が自分でなくなってしまうと思い、平成25年11月下旬から平成26年1月下旬にかけて、精神科病院へ入院し、自分の体の不調に適応できないということで適応障害と診断されました。この病院で初めて、私の体の不調の原因が子宮頸がんワクチンではないかと言われました。

体の痛み、だるさ、きつさが少しはおさまってきたことから、中学3年生に進級した平成26年4月から学校に行くようになりました。遅れていた勉強を取り戻したり、友達と話をしてきたくて、体調が悪くても、無理しても学校に行きました。それでも、夕方になると体のだるさと疲れでぐったりしてしまい、家に帰り着くと、そのままベッドに倒れ込んでしまっていました。

平成26年9月中旬ころから、再びだるさや吐き気、頭痛や腹痛、手足のしびれ等の不調が出てくるようになり、9月下旬からまた学校に通うことができなくなってしまいました。今も、学校にはまだ通えていません。

## 5 おわりに

私には、夢があります。大きくなったらやりたいことがたくさんあります。

しかし、ワクチンを接種してから、それまで当たり前のようにできていたことができなくなってしまいました。私はまだ15歳なのに、できないことがいっぱいあるのです。それでも、私の体は見た目では今までと変わらないことから、ワクチンを接種したからこんな体になったと言っても、誰も理解してくれません。友達からはずる休みをしていると思われていた時期もありました。

家族も、私を支えるために必死で、時には甘えているとか、自分で病気を作っているとされたこともありました。家族にもわかってもらえないことがとても悔しくて、死にたくなるようなときもありました。

私は、ワクチンを接種していなければ、これまでと同じように学校に通うことができました。家族ともこんな喧嘩をせずにすみました。

私は、元気だったころの体に戻れるようにしてほしいです。この苦しみから解放されるなら、どんな治療でも頑張ります。そして、いつかは、ワクチンを打っただけでこんなに人生が一変してしまったことの苦しみや悲しみを、家族や友達や、たくさんの人達にわかってもらえたらいいなと思っています。



## K-9番 江藤あやめ 要約

(平成26年9月現在)

- 1 被害者  
江藤あやめ、山口県山口市在住、現在短大1年生（休学中）
- 2 ワクチンを接種する前の健康状態等  
健康、学校は皆勤、調理部、趣味のダンス
- 3 接種  
サーバリックス2回（2011年1月27日、2013年1月16日）
- 4 経過概要  
2010年 自治体より接種の案内通知、学校の保健だより等での案内  
2011年1月27日（高校1年生） 1回目サーバリックス接種  
接種当日発熱、食欲不振、倦怠感。3～4日後から股関節、体全体の痛み、頭痛。その後、生理不順、発疹、下痢等が出現し継続。  
学校の頻繁な欠席、部活の退部、ダンスの断念。  
2013年1月16日（高校3年生） 2回目サーバリックス接種  
接種翌日から体中の痛み、発熱、頭痛、股関節痛、体全体の痛み等の悪化。その後、左目の痛み、視力低下、視野狭窄、発疹、乳汁分泌等が出現し継続。  
短大に進学するもほとんど出席できないまま休学
- 5 現在の症状  
微熱、関節痛、全身痛、頭痛、視野狭窄、視力低下、発疹、筋力低下（車いす）、下痢、生理不順、乳汁分泌
- 6 受診医療機関・診療科  
14か所
- 7 救済制度の申請 申請未了、準備中。

## K-9番 江藤あやめ (山口県山口市)

(平成26年9月現在)

### 1 はじめに

私は、15歳と17歳のときに子宮頸がんワクチン（サーバリックス）の接種を受けており、1回目の接種時から現在まで副反応被害に苦しんでいます。これからそのことについてお話しします。

### 2 ワクチン接種前の生活や健康状態

私は、調理科の高校1年生のときにワクチン接種を受けましたが、それまでは健康そのもので、学校はほぼ皆勤でしたし、調理部の部活動や趣味のダンスレッスンなどに励んでいました。ダンスは小学生の頃から始め、クラブのショーなどに出ることもありました。

中学3年生になる前の春休みに、原因不明の熱が出て1週間ほど入院したことがありましたが、それ以外に大きな病気をしたことはありません。持病もなく、通院や服薬などはしていませんでした。

食物アレルギーではエビアレルギーがありますが、薬や動物などのアレルギーはありません。

### 3 1回目のワクチン接種の経緯

ワクチン接種の前、私の住んでいる県や市から、子宮頸がん予防ワクチンの接種案内の通知が送られてきました。学校が保護者宛に発行する保健便りなどでも、何度も接種が奨励されていました。

県や市、学校から案内が来ている公費負担のワクチン接種ということで、学校の友人なども、ごく一部の例外（宗教上の理由がある人など）を除いて、ほとんどが接種を受けていたと思います。

私も特に疑問を持つことなく、高校1年生（15歳）だった平成23年1月27日、近くの医院でワクチンを打ってもらいました。このとき、医師や看護師からワクチンの有効性に関する説明などは特になく、副作用については、発熱や吐き気など、ワクチン接種時の一般的な症状が出るかもしれないけれど大丈夫だと言われました。

ワクチンを打ったときには、普通の注射に比べて特に痛いということもなく、注射部位が腫れるようなこともありませんでした。

### 4 副反応の出現

ワクチン接種を終えて帰宅後、熱が出て夜には38℃まで上がりましたが、小さいころからどんなワクチンでも接種当日の夜にはそのくらいの発熱があったので、今回も同じ副作用だろうと思っていました。

ところが、翌日も微熱が引かず、食欲もなく体がきつかったので学校を休みました。

その後も微熱と食欲不振が続き、ワクチン接種の3～4日後くらいから、体のだるさ、股関節や体全体の強い痛み、頭痛などにも悩まされるようになりました。

以後、こうした症状が断続的に続いて月に3回以上学校を欠席（または早退）するようになり、登校する日も親に送迎してもらうことがありました。趣味のダンスも、レッスンやイベントに参加できなくなっていきました。調理部の活動も、大きな包丁を持ったり、

フライパンを持ったりするのも体の痛みなどのために辛く、立って調理をすることもきつくなりました。そのため、部活を休むことが多くなったので1年生が終わる3月には退部せざるを得ませんでした。

症状はだんだん強くなり、生理不順にもなりました。2年生になってからは月に5日くらい学校を休むようになり、1日中ベッドに横になっていることもありました。

平成23年7月の修学旅行には参加しましたが、やはり体調不良で辛い思いをしました。その翌月くらいから、鎮痛剤を何度も飲むようになりました。

9月には筋力低下のためかフラフラするようになり、体育祭には参加せず見学しました。また、下校途中に自転車で転倒し、骨盤を強打してしまったこともありました。

同年10月には肩の関節が痛みだし、体調不良から過呼吸を起こしたことがありました。この月は学校を7日間休んでいます。この頃から、部分的な関節痛が断続的に起きるのではなく、全身の関節という関節が慢性的に痛むようになりました。

11月には学校の三者面談で、私の欠席日数が問題にされました。しかし、体調は改善しないままで、翌12月中旬以降は、ほぼ毎日発熱がありました。年末には38℃近い発熱が続き、関節痛もより強くなりました。

平成24年1月中旬、左の顎から奥歯にかけて痛みが生じました。17日には痛みが顔面全体に広がったほか顔の左半分には発疹ができ、38℃近い発熱もあったため、近くの内科医院（ワクチン接種をした医院）を受診しました。しかし、症状が内科的ではないということで耳鼻科医院を紹介され、同日中に紹介先の医院で帯状疱疹と診断されました。

その耳鼻科医院からは山口日赤病院の皮膚科を紹介され、翌日受診したところ、痛みと発疹の程度がひどいということで県立総合医療センターの麻酔科を紹介され、即日受診しました。その日は神経ブロック注射をしてもらい、鎮痛薬が3種類処方されました。

翌日も医療センターに通院し、20日から30日までは入院して毎日神経ブロック注射を受けました。同月31日から2月5日までは自宅療養しており、その間ずっと微熱がありました。

2月6日から登校しましたが、体調不良は続き、同月中旬には帯状疱疹後の神経痛で左顔面が痛くてたまらなくなったほか、依然として発熱や体の痛みがありました。下痢もするようになり、食欲がなくほとんど食べられなかったため胃腸科を受診すると、十二指腸潰瘍と診断されました。結局、1月と2月は合計25日も学校を休み、登校した日もほとんど自力での通学は不可能で、親に送迎してもらいました。3月中旬以降、登校する日はすべて親に送迎してもらっていました。

3年生に進級してからも発熱や頭痛、関節痛は相変わらずで、だんだん鎮痛剤が手放せなくなりました。調理実習を休みたくないの学校には極力行くようにしましたが、やはり月に3日は欠席する状態で、ときどき早退もしました。体調不良で実習中も辛く、意識が遠のくことさえありました。

平成24年6月14日、右後頭部がビリビリする感覚があり、母に見てもらったところ、頭皮から首にかけて赤い発疹や水泡ができていたとのことでした。山口日赤病院で鎮痛剤等を処方してもらいましたが、その翌日は左顔面にも発疹が出て（痛みもありました）、その後、発熱が数日間続きました。同月下旬、山口日赤病院に紹介してもらった山口大学付属病院で血液検査や自己免疫スクリーニング検査を受け、膠原病や自己免疫疾患の疑いがあると言われました。6月は、学校を8日間欠席しました。

7月2日、検査結果に大きな異常所見はない（抗核抗体のみ異常値）ということで、そ

の大学病院の精神科を紹介されました。

その翌日、紹介された精神科を受診したところ、うつ病と診断され、抗うつ薬や睡眠導入剤、胃薬を処方されました。以後も発熱、頭痛、倦怠感、関節・体の痛みが続いたほか、何も食べられないことが多く、不眠にもなりました。8月からは精神科の個人クリニックに通院しましたが、私は自分の体調不良が精神的な病気のせいだとは思えず、うつ病という診断にとっても違和感がありました。

7月から9月中旬までほとんど学校に行けない状態で、期末テストも受けられず、体育祭も文化祭も欠席でした。とにかく体調が悪いのと、このまま学校に行けないのではないかと不安で、よく泣いていました。

9月には、担任の先生から出席日数が足りず卒業は無理ではないかと言われて大泣きしました。また、私は警察官になりたかったのですが、今の状態ではとても採用試験を受けられないと思い、進路を地元の短大進学に切り替えることにしました。10月にも、担任の先生から卒業できないと言われて帰宅後号泣しましたが、同月中旬、なんとか芸術短大の面接試験とデッサン試験を受けました。まもなく顔面神経痛になり、相変わらず発熱や体の強い痛みも続きましたが、これ以上学校を休めないと思ったので、無理をしてでもできるだけ登校するようにしました。しかし、耐えられず早退することもありました。

11月、短大の合格通知が届きました。同月も体調不良のため7日間学校を欠席しており、通院していた精神科のクリニックで抗うつ剤を増量してもらいました。

12月の初めには下痢が続き、体力がどんどんなくなる感じでした。発熱、体の痛み、倦怠感なども続いていましたが、とにかく高校を卒業したかったので、先生にお願いして年末の数日間補講をしてもらいました。大晦日には高熱が出ました。

## 5 2回目のワクチン接種の経緯

1回目にワクチンを打った時に、3回打たないと効果が出ないと言われていました。体調がずっと悪かったので2回目のワクチン接種を受けることができずにいたのですが、1回目のワクチン接種から約2年も経ったので、受けたほうがいいのかどうか、母が、市の保健センターに問い合わせてくれました。そうしたところ、保健センターの方から、「無償でワクチンを打てる期間は過ぎていて、1万6000円かかるけど、打ってください。」と言われたとのことでした。

当時は、自分に起こっている様々な症状が、ワクチンのせいだとは思っていませんでした。そのため、「打ってください。」と言われて、何も疑問を持ちませんでした。

平成25年1月、17歳のときに、以前と同じ病院で2回目のワクチン接種を受けました。

このときも、医師や看護師からワクチンの有効性に関する説明などは特になく、副作用についての説明も1回目と同じでした。

ワクチンを打ったときには、普通の注射に比べて特に痛いということもなく、注射部位が腫れるようなこともありませんでした。

## 6 2回目ワクチン接種後の状況

ワクチン接種の翌日から体中の痛みがひどくなり、夜眠れませんでした。

1月24日には調理師の国家試験だったので、きつい体を押して、何とか受験をしました。翌日から学校が休みに入りましたが、体の痛み、発熱などで起き上がれませんでした。

1月31日には、調理師試験合格の発表があり無事合格していました。

2月4日には、自動車学校の入校手続きをしましたが、その二日後には、体がきつく、結局教習を続けるのは無理だと判断しました。

相変わらず、発熱、体の痛みは続き、頭痛も以前よりひどくなりました。そして、2月21日には左目が痛くなり、眼科を受診しました。室内の太陽光でもまぶしくて目が開けられませんでした。高校入学時には2.0あった視力も、0.5にまで落ちていました。また、視野の検査をしたところ、見える範囲が狭くなっていると言われました。

3月1日には、何とか高校を卒業することができましたが、卒業後の3月中は、体がきついで、ほとんど家で寝て過ごしました。

4月4日は、短大の入学式に出席しましたが、体がきつくて、帰宅後すぐにベッドに横になりました。結局、短大に入学したものの、4月は6日も学校を休みました。

4月9日には精神科のクリニックを受診しました。体の痛みやきつさを訴えたのですが、うつ病だと言われ、抗うつ薬を増量されました。

その後も、頭痛がひどく、鎮痛剤が手放せない状態になり、食欲も全くなくなり、食事がほとんど取れない日もありました。

4月18日には、股関節が痛くなり、痛みのために眠れない日もありました。5月14日には、全身の関節が痛くなり、症状が悪化したため、翌17日に済生会病院内分科を受診しました。しかし、内科的所見はないとの診断でした。

## 7 学校へ行けなくなったこと

しかし、その後も症状は悪化する一方で、学校も欠席や早退が増えました。6月の後半からは学校をほとんど休むようになりました。

7月26日には、首、胸、肩に赤い発疹が出て、37.1度の発熱があったので、内科を受診したところ、膠原病の疑いがあると言われ、山口日赤病院の内科を紹介されました。7月29日に山口日赤病院を受診し、血液検査をしました。その日の深夜1時頃に肩関節が砕けそうに痛くなり、市販の鎮痛薬を服用したり、湿布を貼ったりしましたが、痛みがひかず、朝まで眠れませんでした。翌日も、両肩が痛くてたまりませんでした。そして、8月1日には、両肩、両股関節、両肘まで痛みが広がり、37.4度まで熱が上がりました。その後も症状は続き、痛みのために全く食事もとれない状態になりました。

8月5日に血液検査の結果が出ましたが、特に異常はありませんでした。その日のうちに、膠原病外来の医師の診察を受けたところ、SLE（全身性エリテマトーデス）とシェーグレン症候群の疑いと言われ、口腔内を切開し、唾液腺を採取され、4針縫いました。

しかし、8月13日に結果を聞いたところ、膠原病も、SLEもシェーグレン症候群も否定され、「あるとすれば繊維筋痛症」と言われ、精神科のクリニックを紹介されました。

8月16日に精神科のクリニックを受診しましたが、「繊維筋痛症はストレスが原因」と言われ、抗うつ薬を追加されました。そして、繊維筋痛症の認定医である整形外科を紹介されました。

翌日、整形外科を受診して検査を受けた結果、繊維筋痛症と診断されました。

その後も症状が回復する見込みもなく、6月下旬以降、ほとんど学校には行けていなかったため、9月には正式に学校に休学届を出しました。

## 8 ワクチンとの関連性を知ったこと

10月には、山口大学付属病院神経内科が厚生労働省の指定医療機関に指定されたと聞いたため、10月21日に同科を受診しました。これまでの症状の経過等を説明したところ、「子宮頸がん予防接種後アジュバント関節炎」と診断されました。このときはじめて、ワクチン接種と自分の様々な症状との関連性があることを知りました。まさか、ワクチン接種が原因だとは思ってもいなかったので驚くとともに、ショックを受けました。

その後、平成26年2月7日から3月5日までと、同年6月11日から7月7日まで、山口大学付属病院に各種検査のために入院をしました。

検査の結果も「子宮頸がん予防接種後アジュバント関節炎」という診断は変わっていません。

そして、9月11日からは、血漿免疫吸着療法を受けるために入院しており、現在も入院中です。なお、入院に際して、ギランバレー症候群との診断が付いていますが、これは、血漿免疫吸着療法を受けるのに保険適用されるためだという説明を受けています。

## 9 現在の状況

上記のとおり、現在の山口大学付属病院に入院して治療を受けています。少しずつ症状はよくなってきているようには感じますが、未だに、微熱、関節痛、全身痛、頭痛、視野狭窄、視力低下、発疹の症状は続いています。免疫吸着療法が効くかどうかは今のところわからないと言われており、いつまで入院して、治療を続けなければいけないのかはわからない状態です。

また、筋力が低下しているため、10メートルくらいまでなら杖を使って歩けますが、それ以上は歩けないので、基本的には車いすを使って移動をしています。筋力をつけるために、1日1回リハビリ（マッサージ、自転車こぎ、筋トレ）や作業療法（細かい手作業）等を行っています。

また、下痢や生理不順もあり、また、妊娠もしていないのに乳汁分泌が時々あります。

薬は、リリカというしびれをとる薬を1日4回、メリスロン錠というめまいを抑える薬を1日3回、トラムセットという痛み止めの薬を1日4回、ムコスタという吐き気止めの薬を1日3回飲んでいきます。

以前は、サインバルタという抗うつ薬も飲んでいましたが、飲み始めてから、血圧がコントロールできなくなり、脈拍が常に120を超えている状態になり、今年の1月14日には自宅で気を失って倒れて救急車で運ばれたため、やめました。ただし、医師は、倒れたのは、サインバルタのせいか、ワクチンの副作用のせいかわからないと言っていました。

## 10 最後に

私は、ワクチン接種の副反応のせいで、3年以上もの間様々な症状に苦しんでいます。いろいろな医療機関を紹介され受診しましたが、未だに症状はなくなりません。医療機関では、「お母さんがいちいち子どもの熱などの原因を探ろうとするから悪いのだ」と言われたり、原因がわからないからうつ病だと決めつけられたりして心無い発言を受けたこともありました。また、体が痛いと言ったところ、医師から「本当に痛むのか」と言われ、思いつき、肩や肘や関節を押されたりして、痛みのあまり泣いてしまったこともありました。

また、ワクチンの副反応のせいで、趣味のダンスや部活動も辞めざるを得なくなり、学

校にもまともに行けず、今後も復学の見通しが立っていません。

私は、両親も祖父や親族も警察官ということもあり、子どもの頃から警察官になるのが夢でした。しかし、このような体ではとても警察官になることはできず、その夢も諦めざるを得ません。

母は、現在は仕事をしていないため、通院には必ず付き添ってくれますし、入院中は片道1時間くらいかけて、毎日付添いに来てくれています。父も休みの日には付添いに来てくれています。しかし、両親に心配をかけ、時間も取らせていることは申し訳なく思います。

また、母からは、治療費、薬代、交通費をあわせると月に20万円は超えていると聞いています。そんな両親の経済的負担を考えると申し訳なく思います。

ワクチン接種による被害者は私かもしれませんが、実際には、私だけではなく、私に関わる家族にも被害が及んでいるということを知って欲しいです。

本当は、体を元に戻して欲しいし、人生を元に戻して欲しいのですが、今のところそれができません。そうであれば、せめて、国が公費で費用を負担をしてワクチン接種を勧めた以上、その結果に対する責任をとって、きちんとした補償をしてほしいと思います。

2015年3月31日発行

発行元 全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会  
薬害対策弁護士連絡会  
薬害オンブズパーソン会議

連絡先 薬害オンブズパーソン会議  
〒160-0022  
東京都新宿区新宿1-14-4 AMビル4階  
TEL 03 (3350) 0607  
FAX 03 (5363) 7080  
Mail [info@yakugai.gr.jp](mailto:info@yakugai.gr.jp)  
URL <http://www.yakugai.gr.jp/>